明治学院歴史資料館資料集　第二十集

明治学院歴史資料館

はじめに

本年、『明治学院歴史資料館資料集』は二十歳を迎えます。多くのみなさまのご支援によって、二十年にわたり本資料集をお手元にお届けできましたこと、ならびに様々なご感想や貴重なご意見を賜りましたことを、この場を借りて心より感謝申し上げます。

二〇〇四年に刊行された第一集は、「井深梶之助生誕一五〇年記念号」でありました。今回の第二十集でも取り上げました明治学院第二代総理（学院長）井深梶之助は、主に晩年のことですが、人に頼まれて、多くの聖句を揮毫しました。練習に時間を費やし、相当苦心して一枚一枚を書いていたようです。残された彼の日記に見える「之レガ為メニハ相当ノ苦心練習ヲ費シタレドモ恐クハ十分ノ一モ人ニハ分ラザルベシ」（一九三一年五月五日条）といった溜息交じりの言葉にも、その苦労がうかがえます。

しかしその一方で、井深本人は、人のために揮毫することを「奉仕」の一つと考え、書き続けました。ここにも、明治学院の創設者ヘボンが生涯貫いた「Do for others（他者への貢献）」の精神を見出すことができます。

第二十集では、「筆のあと、さまざま」と題し、館蔵資料の中から、ヘボンをはじめ井深、島崎藤村、馬場孤蝶、賀川豊彦、佐々木邦、沖野岩三郎など、学院を代表する先人たちの墨蹟資料をご紹介いたします。書画帖・掛軸・短冊・色紙・扇面など、さまざまな形に残された筆のあと。

そこに込められた先人たちの思いを感じ取っていただければ幸いです。

今後とも、みなさまのご支援、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

二〇二四年三月

明治学院歴史資料館　館長　戸谷　浩

目次

筆のあと、さまざま

■書画帖

『千里如晤』……1

『白頭帖』……14

書画帖とそれぞれの明治学院時代　27

戸川秋骨著「書画帖」より／生方敏郎著「明治時代の学生生活」より／同「卓上演説論」より／島崎藤村著「学生時代の戸川秋骨君」より／沖野岩三郎著「小諸なる古城のほとり」より

■個人の作品

井深梶之助……30

井深梶之助の聖句揮毫と奉仕　35

井深梶之助所用印一覧　37

島崎藤村……38

島崎藤村の明治学院時代―「明治学院の学窓」より　39

馬場孤蝶……40

馬場孤蝶の明治学院時代―「明治学院時代の追憶」より　42

賀川豊彦……44

賀川豊彦の明治学院時代―「腹這ひして見た蜃気楼」より　49

佐々木邦……51

佐々木邦の明治学院時代―「昔のミッションスクール」より　53

沖野岩三郎……54

沖野岩三郎の明治学院時代―「非戦論の青年たち」より　56

主要参考文献

凡例

一、本資料集は、明治学院歴史資料館所蔵資料から、明治学院にゆかりのある人々の墨蹟資料を集め、それらの図版に翻刻および解説を付したものである。

一、「書画帖」編と「個人の作品」編で構成する。

一、参考資料、および揮毫した諸氏の明治学院に関連するエピソードを適宜掲載した。

一、個人の作品については、図版の下に、資料の形態および作成年を記した。

一、図版の掲載に際して、当館所蔵資料については特に注記せず、他機関所蔵資料についてはその旨を明記した。なお、図版を二次使用する場合は、必ず各機関の許可を得ること。

一、翻刻は原則として原資料の通りに行った。ただし、通読の便を考慮して次のような校訂を施した。

・漢字は常用漢字を使用し、俗字や略字等は改めた。

・適宜、濁点および句読点を補った。

・誤字・脱字・書き間違いと思われるものについては、右傍に〔ママ〕を付した。ただし、推定できるものについては、その内容を〔　〕で示した。

・判読困難な箇所は□で示した。字数が分かる場合は字数分を□で示した。

一、解説において『井深梶之助日記』は『井深日記』と略記した。

本書の作成にあたっては、明治学院歴史資料館特任研究員 松本智子が担当した。編集実務に関しては、明治学院歴史資料館職員 小杉義信、同 三上耕一、同学芸員 亀元円の協力を得た。また校正において特任研究員 細井守の協力を得た。

なお、本書の作成にあたり、福岡大学教授 髙橋昌彦氏、群馬地域学研究所代表理事 手島仁氏、賀川豊彦記念松沢資料館副館長 杉浦秀典氏、福岡大学名誉教授 山田洋嗣氏に多くのご教示を賜りました。心より御礼申し上げます。

題字揮毫

徳田　龍二（一九七七―　）

鳥取県出身。号は心鐸。明治学院高等学校芸術科書道非常勤講師。毎日書道展会員。日展入選。二〇一五年より学校法人明治学院年間主題聖句の揮毫を担当。

筆のあと、さまざま

明治学院歴史資料館

千里如晤

（表紙）

〈書誌〉
一帖　十八折
寸法　縦十七・二cm、横十五・二cm
布表紙（裏表紙は改装）
題簽「千里如晤　湖山老人題」
一折裏の裏面に「西島直太郎」朱陽印あり。
二〇〇七年十月二十九日、村上良夫氏より寄贈。

なお、題簽下部に、漢詩人小野湖山（一八一四－一九一〇）のものと思われる左のような印（愿□）が押されている。

『千里如唔』について

当該資料は、一八八四（明治十七）年五月から八月頃にかけて上州（現在の群馬県）伊香保温泉に滞在した書家や学者などの文人墨客十八名によって書かれた書画帖である。明治学院の創設者J・C・ヘボンとその妻クララの書いた聖句が含まれている。ヘボンの聖句については、既に『明治学院百五十年史』にその写真が掲載され周知されているが、一方で当該資料そのものについての全体的な調査は進んでいない。そこで、今回はまず、当該資料の全体を図版として掲載するとともに、翻刻を付し、各筆者についての簡単な解説を付して概観を示すことにする。

なお、書画帖の筆者の一人である小中村清矩（四頁参照）が一八八四年に著した「伊香保日記」（『有声録』一九一五年）の中に当該資料について言及していると思われる箇所があるので、小中村の動向も確認しながら、ここに紹介しておきたい。

小中村は、湯治のため一八八四年五月六日、息子の三作とともに伊香保温泉に向けて午前六時二十分上野発の汽車に乗り、十時四十分頃に高崎に到着する。知り合いの家に寄るなどしたのち、午後一時過ぎ頃、人力車を雇って高崎を出発、七時過ぎに木暮八郎の旅館に到着した。木暮八郎の旅館は、楽山館という伊香保温泉でも有力な旅館であり、一八七九（明治十二）年七月、英照皇太后が行啓の際に滞在した場所でもある。小中村は五月二十九日の朝、伊香保を出発し、帰途につく。

小中村の「伊香保日記」によると、五月八日条および十四日条に、書画帖に関する次のような記述が見える（関連箇所に傍線を補った）。

明治十七年五月八日条

此あたりに経師とて都丸養一郎といふ人、書画帖をもて来て、染筆を乞ふ

ついでに語りけるは、渋川の駅をわづかに離るゝ、金井といふさとに、堀口貞歛（ハル）、号を藍園といふ奇人あり。〔中略〕宿のあるじも来て、歌をとこへり。

明治十七年五月十四日条

三作は徒然に堪へず、都丸の家は近き程なれば、行きて月琴を聞きなどす。〔中略〕此家に、函館県大書記官竹裕のやどりてあるに乞ひたりとて、例の書画帖に、墨竹を画がきしを、都丸のもて来てみせたり。その人は、神祇官の頃、権少祐たりし事ありて、みしらずしもあらず。

右の日記の内容によると、小中村のもとに経師の都丸養一郎という人物がやってきて書画帖に染筆を求め、更に木暮八郎からは和歌を求められていること、更に書画帖には「函館県大書記官竹裕」すなわち有竹裕の「墨竹」が描かれていることになる。当該資料に目を移すと、たしかに小中村清矩の和歌と有竹裕筆の墨竹の書画が含まれており、「伊香保日記」に見える書画帖は当該資料そのものである可能性が高いと言えよう。また、書画帖に揮毫している大槻如電や寛友の名前が「伊香保日記」に見えることも注意すべき点であり、今後の調査研究が待たれる。

ヘボンと伊香保温泉

次に、ヘボン夫妻が伊香保に滞在していたことについて確認しておきたい。

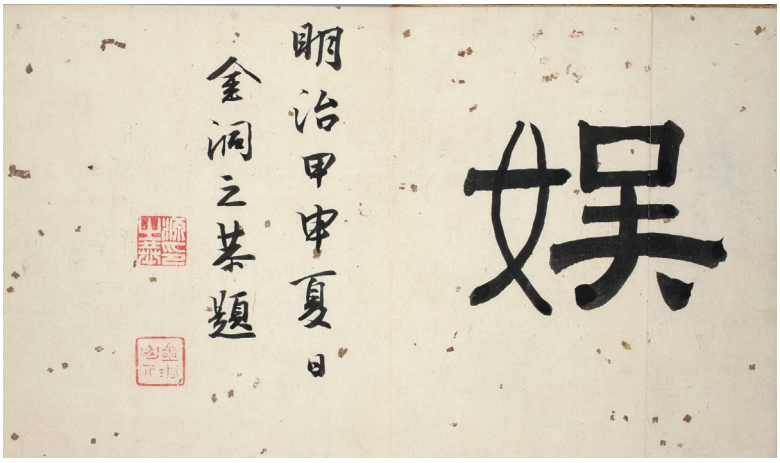
一八八四（明治十七）年五月当時、ヘボンが伊香保に滞在していたことを確認できる資料は、現在のところ、当該資料（八頁）に記されたクララの署名部分「C. M. Hepburn Ikao May 15th 1884」以外に、次に掲げる小中村の「伊香保日記」五月九日条の記述のみである。

昨夜横浜の平文（ヘボン）、妻と、もに此家の別屋につきて逗留す。おのれも八九年前、眼疾を患ひたりし時、治療をうけたる事もあれば、行きて対面す。家は山に臨みて新築したれば、ことに静なる所なり。

日記中の「此家」は、小中村が投宿した木暮八郎の楽山館のこと。ヘボン夫妻は、その「別屋」に「昨夜」すなわち五月八日に到着し宿泊していた。小中村は目の病気を患った折にヘボンの治療をうけたこともあり、面識もあったため会いに行ったという。ヘボンおよびクララの揮毫の署名は五月十五日付であることから、少なくともヘボン夫妻は一八八四年五月八日から十五日までは伊香保に滞在していたことになる。日本鉄道の上野・高崎間が同年五月一日に開通していたため、横浜山手二四五番に住んでいたヘボン夫妻も鉄道を利用し伊香保へ向かったものと推測される。当時、高崎から伊香保までは人力車か駕籠が一般的に利用されており、東京から伊香保までの所要時間は合計で約十時間ほどであった。

金井（かない） 之恭（ゆきやす）（一八三三－一九〇七）

（1折表）



（1折裏）　（2折表）

明治時代の官僚、能書家。字は子誠、号は梧楼、金洞山人、金洞仙史、錦鶏など。現在の群馬県佐波郡に生まれる。

一八六七（慶応三）年、新田満次郎（俊純）を擁し討幕の挙兵を企て投獄された。一八六八（明治元）年、東京府市政局に出仕、翌年太政官少史、一八七四（明治七）年権少内史、同年四月台湾蕃地事務局御用掛となり、八月全権弁理大臣大久保利通の対清交渉に随行した。その後、内閣大書記官・元老院議官などを経て一八九一（明治二十四）年四月貴族院議員となった。書を能くし、大久保利通の墓碑銘を書いたことでも知られる。晩年には、日本書道会・書道奨励会の会長を務めた。

国立公文書館所蔵「内閣大書記官金井之恭伊香保へ出発ノ件」（一八八四年七月二十四日付）によると、病気療養のため伊香保温泉へ行く旨の届が金井より提出されている。

清
娯
明治甲申夏日
金洞之恭題
〔印〕「梧興」「源之恭印」
「金洞山人」

松岡（まつおか） 環翠（かんすい）（一八一八－一八八七）

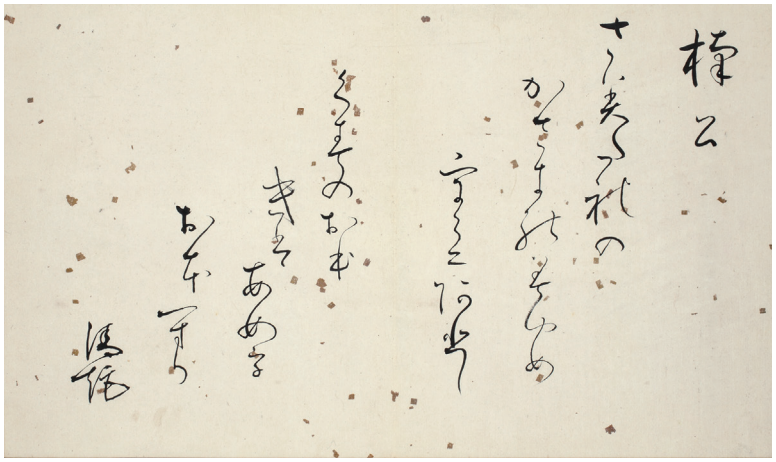
（2折裏）　（3折表）

江戸後期・明治時代の画家。伊勢津藩士松岡光亨の子。名は正訓（まさのり）、別に光訓（みつのり）。環翠は号。五十嵐竹沙に師事し、山水花鳥を能くした。特に好んで墨蓮を描いたという。藤野海南（本書十三頁参照）の旧雨社に参加。

『群馬新聞』一八八〇（明治十三）年八月二十一日の雑報には「伊香保へ画工松岡氏来訪」と題して次のような記事が見える。「有名なる東京下谷御徒町の画工松岡環翠先生が、当県西群馬郡伊香保の木暮八郎方へ来遊され、去る十日から諸方よりの依頼の画を揮毫されし由なるが、定て我も々々とやつて来て御願ひ申す事で有りま正（しょう）」。環翠は以前にも伊香保の木暮八郎の旅館を訪れ、依頼に応じて揮毫していたことが知られる。

和露嬌
無力
六十七翁
環翠
〔印〕「訓」「環翠」
※天地逆に押印

小中村（こなかむら）　清矩（きよのり）（一八二一－一八九五）



（4折表）　（3折裏）

楠公

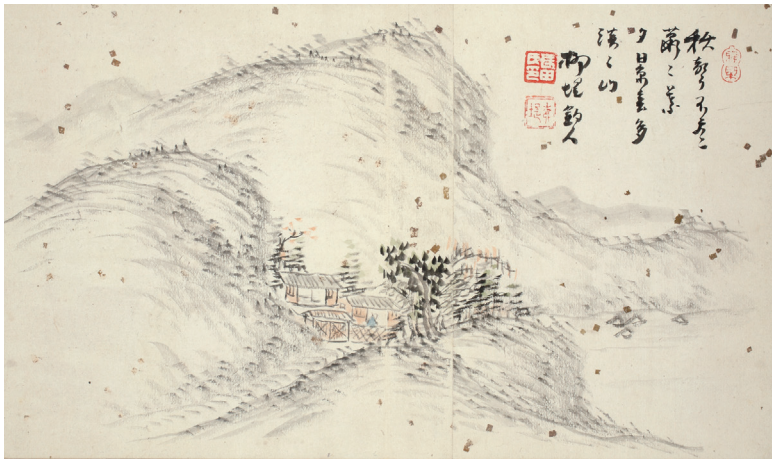
さみだれの　かさぎのみゆめ
うらにあひし　くすのおほきは
あめをおほへり

清矩

国学者。現在の東京都に生まれる。『古事類苑』編纂者の一人。当該資料が作成された一八八四（明治十七）年当時、小中村は六十四歳、従六位、東京大学教授を務めていた。伊香保温泉では、末子の三作とともに木暮八郎の宿に投宿。国立公文書館所蔵「東京大学教授小中村清矩伊香保へ熱海へ入浴并帰京ノ件共二」によると、小中村は、病気療養のため一八八四（明治十七）年五月六日より伊香保へ湯治に出掛け、同月二十九日に帰京しており、「伊香保日記」の記述（本書二頁参照）と合致する。

当該歌は後に『大八洲歌集』（本居豊穎撰、大八洲學會、一八八八年）所収。「楠正成卿」の歌題にて「清矩／さみたれの笠置の御夢うらにあひし楠の大木ハあめをおほへり」とある。

長田（おさだ）　規矩太郎（きくたろう）（一八六六－？）



（5折表）　（4折裏）

秋声不尽
蕭々葉
夕景無多
淡々山

柳堤釣人

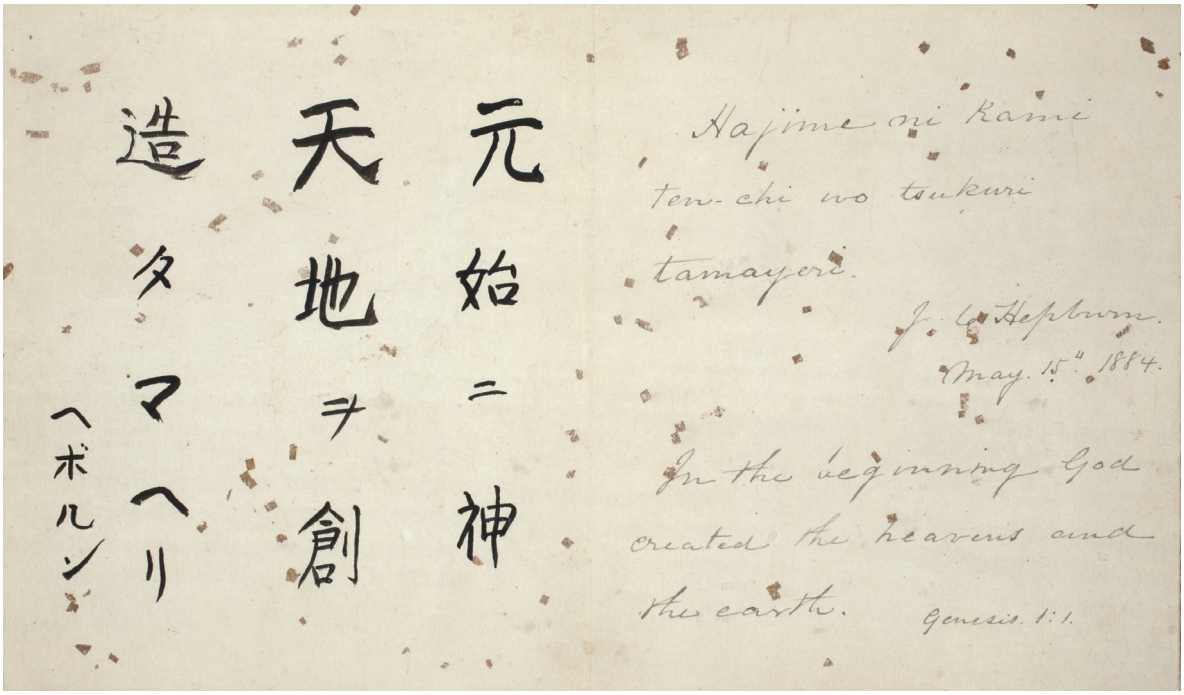
〔印〕「長田氏印」「柳堤」

秋田県に生まれる。実業家。南宗派画家。柳堤は号。生駒柳崖に師事し、山水画をよく描いた。

秋田県本荘市の大地主で名望家として知られた父長田文五郎から一九〇五（明治三十八）年に家督を相続。明治末期から大正初期にかけて、秋田県の本荘銀行・本荘倉庫株式会社の各専務取締役を務めた。

「秋声不尽」の詩句は、中国明代の詩人・張羽の「行楽過西崦」と題する七言律詩の一部。

J. C. Hepburn ジェームス・カーティス・ヘボン（一八一五－一九一一）



（6折表）　（5折裏）

元始ニ神
天地ヲ創
造タマヘリ
ヘボルン

Hajime ni Kami
ten-chi wo tsukuri
tamayeri.

J. C. Hepburn
May 15th, 1884.

In the beginning God
created the heavens and
the earth.

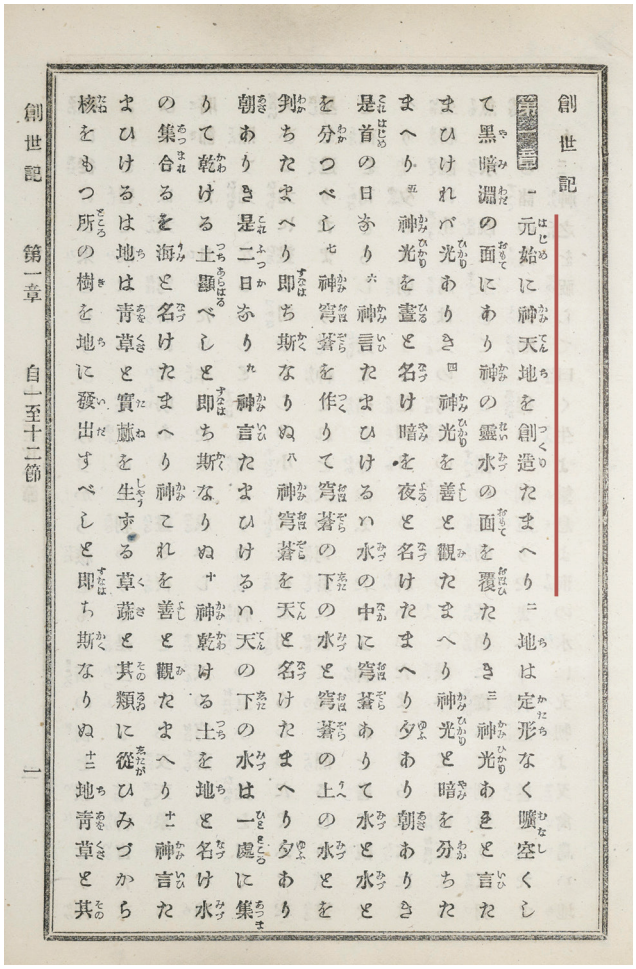
Genesis 1:1

明治学院初代総理。米国ペンシルヴェニア州に生まれる。一八五九（安政六）年に宣教医として来日し、一八九二（明治二十五）年帰国。一八六七（慶応三）年には日本初の和英辞書『和英語林集成』を編纂し出版した。ローマ字表記の日本語を見出しとし、片仮名と漢字表記を添えて英語の説明を加えたものであった。使用したローマ字は、後にヘボン式として普及。

一八八四（明治十七）年当時、ヘボンは六十九歳、『旧約聖書』の翻訳を進める新常置委員会の委員長として聖書翻訳に尽力していたころである。ヘボンが書画帖に書いた内容は『旧約聖書』「創世記」第一章一節の冒頭。なお、片仮名と平仮名の違いはあるが、日本語表記部分と同じ本文が『旧新約全書』（北英国聖書会社、一八八七年）に見える（次頁参照）。

当該資料のほかに、ヘボン自筆の書として、「神惟一且神与人之間中保亦一乃人也即耶蘇」（年未詳）、および横浜での修行を終えて故郷へ帰る眼科医川室道一に書き与えた「仁徳」（一八七四年）がある（高谷道男編訳『ヘボンの手紙』一九八二年、有隣堂、横浜開港資料館『昭和五十八年度特別展示　ヘボンと横浜展』図録参照）。

ヘボン肖像　〔1889年〕

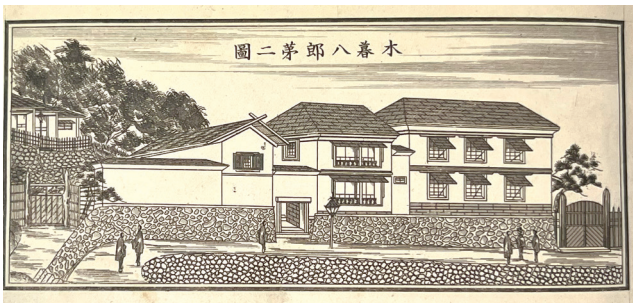


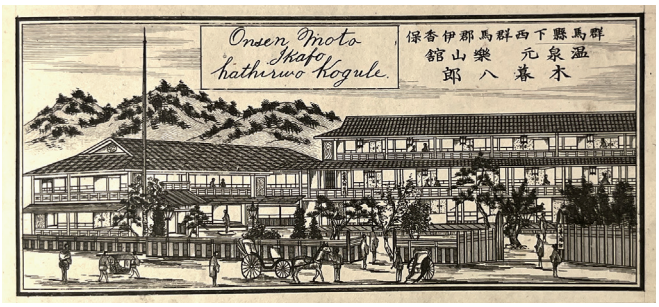
創世記

第一章　一元始に神天地を創造たまへり二地は定形なく曠空くして黑暗淵の面にあり神の靈水の面を覆たりき三神光あれと言たまひければ光ありき四神光を善と觀たまへり神光と暗を分たたまへり五神光を晝と名け暗を夜と名けたまへり夕あり朝ありき是首の日なり六神言たまひけるい水の中に穹蒼ありて水と水とを分つべしセ神穹蒼を作りて穹蒼の下の水と穹蒼の上の水とを判ちたまへり即ち斯なりぬ八神穹蒼を天と名けたまへり夕あり朝ありき是二日なりキ神言たまひけるい天の下の水は一處に集りて乾ける土顯べしと即ち斯なりぬ十神乾ける土を地と名け水の集合るを海と名けたまへり神これを善と觀たまへり十一神言たまひけるは地は青草と實蔵を生ずる草蔬と其類に從ひみづから核をもつ所の樹を地に發出すべしと即ち斯なりぬ十二地青草と其

創世記　第一章　自一至十二節　一

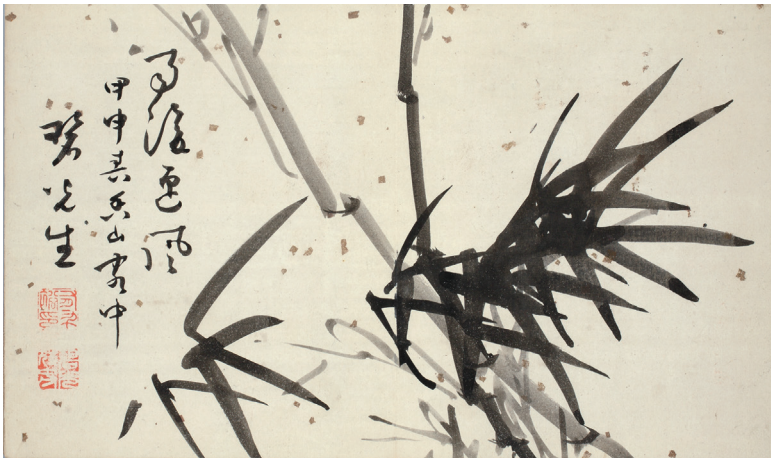
【参考】『旧新約全書』北英国聖書会社、1887年　明治学院大学図書館所蔵
＊前頁該当箇所を赤線で示した。





【参考】『〔群馬県名家繁昌図録〕』〔明治期刊行〕より
国文学研究資料館所蔵
木暮八郎の経営した楽山館の図。上段右は本館、下段はヘボン夫妻が宿泊したと思われる別館の図。

有竹（ありたけ） 裕（ゆたか）（一八三八－一八八六）



（7折表）　（6折裏）

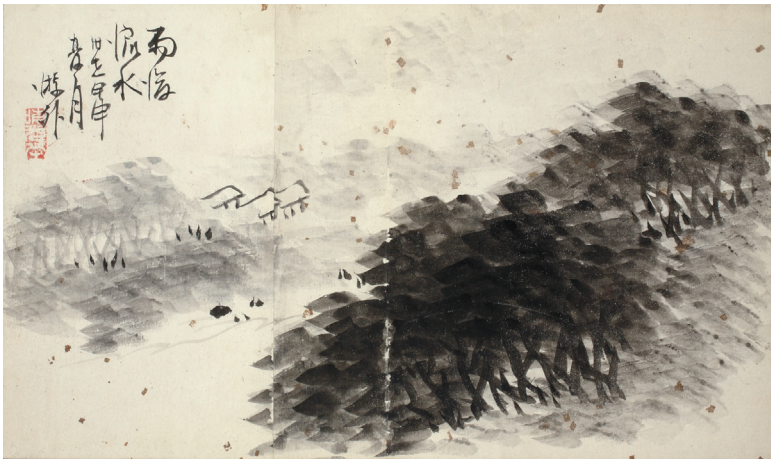
雨後迎風
甲申春香山客中
碧光生
〔印〕「有竹裕印」「碧光儛史」

明治時代の官吏。碧光は号。現在の岐阜県に生まれる。一八七二（明治五）年に函館へ渡り、開拓権少書記官、函館県少書記官、大書記官等を歴任。その後、東京に移る。

国立公文書館所蔵「函館県大書記官有竹裕湯治願ノ件」および「函館県大書記官有竹裕湯治追願ノ件共二」によると、有竹は一八八四（明治十七）年三月頃、熱海温泉にて病気療養中であったが、全癒しないため、伊香保温泉での湯治を理由に更に六十日間の休暇を函館県令に申請。許可された六十日が終わる七月上旬には、三十日間の延長を申請している。これらの申請から恐らく有竹は五月上旬から八月上旬にかけて伊香保温泉に滞在していたと推測される。小中村の「伊香保日記」にも、有竹が五月十四日に木暮八郎の宿に滞在し、都丸養一郎に乞われて書画帖に墨竹を描いたことが記されている。この時の書画帖が当該資料と思われる。ただし、五月は暦の上では夏であり、有竹が「甲申春」、すなわち「明治十七年春」と記していることには疑問が残る。この年、有竹から出された湯治願は三月の熱海温泉、五月の伊香保温泉（および七月の追願）のみであり、三月以前、すなわち春に有竹が伊香保へ湯治に出掛けた形跡は見当たらない。

一八八五（明治十八）年に函館にて開催された大書画会では、函館在住の画家の一人として有竹の揮毫も人気を集めたという（『函館市史 通説編 第三巻』八八三頁、函館市史編さん室編、一九九七年）。

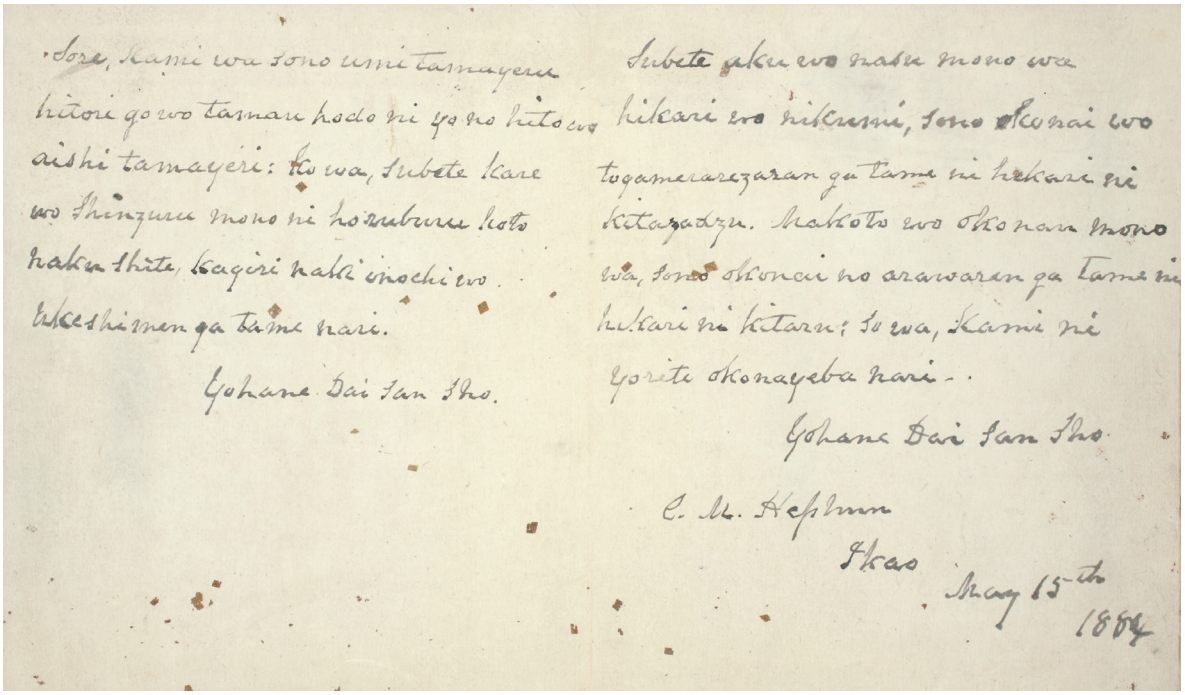
游外（詳細未詳）



（8折表）　（7折裏）

雨後
流水
時世甲申
夏月
游外
〔印〕「哺光堂」

C. M. Hepburn　クララ・メアリー・ヘボン（一八一八－一九〇六）


Sore, Kami wa sono umi tamayeru
hitori go wo tamau hodo ni yo no hito wo
aishi tamayeri: ko wa, subete kare
wo Shinzuru mono ni horuburu koto
naku shite kagiri naki inochi wo
ukeshimen ga tame nari.
Yohane Dai San Sho.

Subete aku wo nasu mono wa
hikari wo nikumi, sono okonai wo
togamerarezaran ga tame ni hikari ni
kitaradzu. Makoto wo okonau mono
wa, sono okonai no arawaren ga tame ni
hikari ni kitaru: so wa, Kami ni
yorite okonayeba nari.
Yohane Dai San Sho
C. M. Hepburn
Ikao
May 15th
1884

（9折表）　（8折裏）

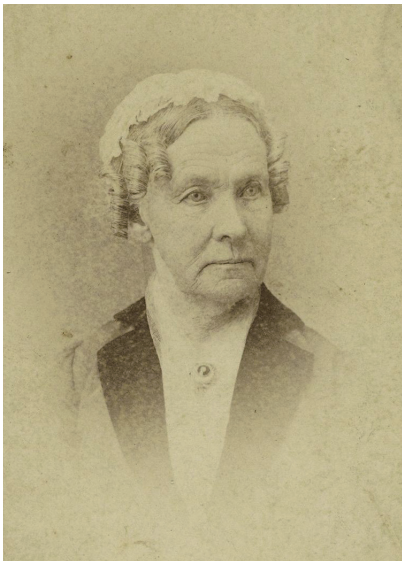
Sore, Kami wa sono umi tamayeru
hitori go wo tamau hodo ni yo no hito wo
aishi tamayeri: ko wa, subete kare
wo Shinzuru mono ni horuburu[o] koto
naku shite kagiri naki inochi wo
ukeshimen ga tame nari.
Yohane Dai San Sho.

Subete aku wo nasu mono wa
hikari wo nikumi, sono okonai wo
togamerarezaran ga tame ni hikari ni
kitaradzu. Makoto wo okonau mono
wa, sono okonai no arawaren ga tame ni
hikari ni kitaru: so wa, Kami ni
yorite okonayeba nari.
Yohane Dai San Sho

C. M. Hepburn
Ikao
May 15th
1884

米国コネティカット州に生まれる。一八四〇年にJ・C・ヘボンと結婚。一八五九年、夫ヘボンとともに開港直後の横浜に到着。翌年には滞在先の成仏寺で二人の生徒に英語を教え始める。一八六三年に夫妻が横浜居留地三九番に開設したヘボン塾（ミセス・ヘボンの学校）では、主にクララが授業を担当。この塾が発展して現在の明治学院およびフェリス女学院となった。クララのもとで英語を学んだ生徒には、林董、高橋是清、益田孝、沼間守一など、後に日本の各界で活躍する多くの俊英がいた。

クララが書画帖に書いた内容は『新約聖書』の「ヨハネによる福音書」第三章十六節および二十から二十一節。夫ヘボンが一八八〇年に完成したローマ字による『新約全書』の「YOHANE」の内容とほぼ同じである（次頁参照）。


クララ肖像　〔1889年〕

3. 11—23.] YOHANE. 219

Nanji wa Isurayeru no shi naru ni, nao kono koto wo shirazaru ka. 11 Makoto ni, makoto ni nanji ni tsugen, Warera shirishi koto wo ii, mishi koto wo akashi suru ni, nanji wa warera no akashi wo ukedzu. 12 Moshi ware chi no koto wo iu ni, nanji shinzedzuba, mashĭte ten no koto wo iwan ni wa, ikade shindzuru koto wo sen ya. 13 Ten yori kudari, ten ni oru hĭto no Ko no hoka ni, ten ni noborishi mono nashi. 14 Mōse no ni hebi wo ageshi gotoku, hĭto no Ko mo ageraru beshi: 15 subete kore wo shindzuru mono ni horoburu koto naku shĭte, kagiri naki inochi wo ukeshimen ga tame nari. 16 Sore, Kami wa sono umi tamayeru hĭtori-go wo tamau hodo ni yo no hĭto wo aishi tamayeri: ko wa, subete kare wo shindzuru mono ni horoburu koto naku shĭte, kagiri naki inochi wo ukeshimen ga tame nari. 17 Kami no sono Ko wo yo ni tsŭkawashi tamayeru wa, yo no tsumi wo sadamen to ni aradzu; kare ni yorite yo wo sŭkuwan ga tame nari. 18 Kare wo shindzuru mono wa, tsumi ni sadameraredzu, shinzezaru mono wa sude ni sono tsumi sadamareri: so wa, Kami no umi tamayeru hitori-go no na wo shinzezaru ni yoru. 19 Tsumi no sadamaru yuye wa, hikari yo ni kitarishi ni, hĭto sono okonai no ashiki ni yorite hikari wo aisedzu, kayerite kuraki wo aisureba nari. 20 Subete aku wo nasu mono wa hikari wo nikumi, sono okonai wo togamerarezaran ga tame ni kikari ni kitaradzu. 21 Makoto wo okonau mono wa, sono okonai no arawaren ga tame ni hikari ni kitaru: so wa, Kami ni yorite okonayeba nari.

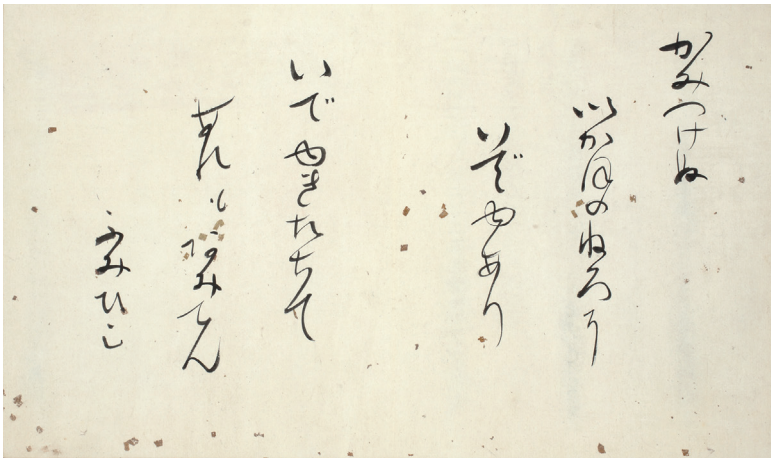
22 Kono nochi Iyesu deshi to Yudaya no chi ni itari, tomo ni kashĭko ni todomarite bapŭtesuma wo hodokosu. 23 Yohane mo mata Sarim ni chikaki Ainon ni orite bapŭtesuma wo hodokosu: kashĭko

【参考】Warera no shu Iyesu Kirisuto no shin yaku zen sho = The new testament in Japanese / transliterated by J. C. Hepburn, American Bible Society, 1880

明治学院大学図書館所蔵

＊前頁該当箇所を赤線で示した。

大槻（おおつき） 文彦（ふみひこ）（一八四七－一九二八）



（10折表）　（9折裏）

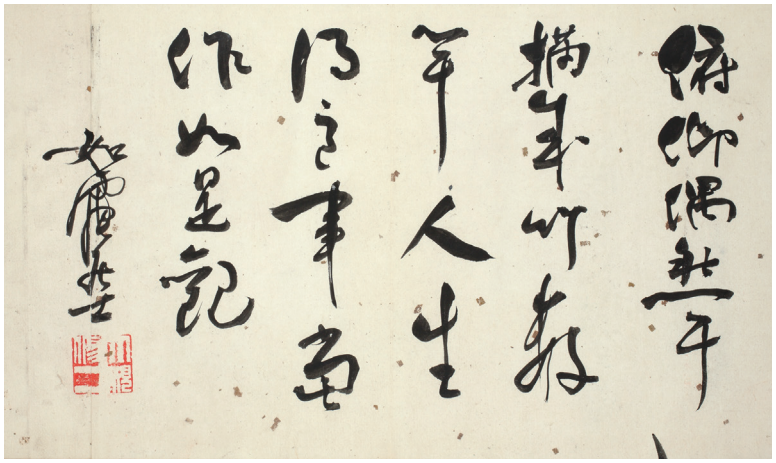
かみつけぬ
いかほのねろに
いでゆあり
いでゆきたちて
あれもあみてん
ふみひこ

仙台藩の儒学者大槻磐渓の三男。国語学者。日本初の本格的な国語辞書『言海』の著者で、一八八二（明治十五）年に初稿を完成。その後、清書を経て一八八六（明治十九）年に再校を終えている。伊香保温泉を訪れ、この書画帖に揮毫したのは、丁度その間のこと。

和歌の初句・二句は、『万葉集』巻十四の「可美都気努伊可抱乃祢呂尓布路与伎能遊吉須宜可提奴伊毛賀伊敝乃安多里」に拠ると思われ、文彦は『言海』の「ねろ」の項目でもこの万葉歌の上句を用例として挙げている。「ねろ」は嶺の意。ここでは榛名山を指す。

文彦はこれ以前にもたびたび伊香保温泉を訪れ、木暮八郎の宿に滞在。一八八二年には木暮の求めに応じて地誌『伊香保志』上中下巻三冊を上梓した。

大槻（おおつき） 如電（じょでん）（一八四五－一九三一）



（11折表）　（10折裏）

俯仰偶然干
描成竹数
竿人生
得意事当
作如是観
如電居士
〔印〕「大槻修二」

大槻磐渓の次男。文彦の兄。本名は清修。如電は号。修二は通称。蘭学者、考証学者。仙台藩藩校養賢堂に学ぶ。文部省に出仕するも一八七四（明治七）年辞官し、家督を弟文彦に譲った後は在野の学者として和漢洋学・文学・音楽などの分野で幅広く活躍した。

如電は文彦と同じく、たびたび伊香保温泉を訪れ、木暮八郎の宿に滞在している。一八八四（明治十七）年五月二十七日も木暮の宿に到着の予定であったが、到着しておらず（『伊香保日記』）、翌朝以降に訪れたようである。

大槻文彦編『伊香保志』中巻には伊香保を詠んだ如電の漢詩「路自香山登幾回　春名嶽畔小湖開　三旬慣聴渓泉響　忽怪涛声岸下来」が、下巻には如電の「伊香保八景湯治土産」が見える。

荒木（あらき） 寛友（かんゆう）（一八五〇－一九二〇）

明治・大正期の日本画家。本名は鐸、寛友は号。父・寛一に学び、後に山本琴谷に師事し、花鳥山水画をよくした。太政官、修史館、内務省等に出仕。のちに華族女学校（現在の学習院女子大学）の教授となる。「籬菊…」は『画書題跋落款自在』（一八八〇年）に中国明代の画家・辺寿民の詩句として見える。

（11折裏）　（12折表）

籬菊乍開白衣不来
聊烹山茶以当
酒賞　寛友醉毫
〔印〕「木鐸」「楽琴書以消憂」

蘭崖（詳細未詳）

群馬県立文書館所蔵湯本正喜家文書の中に「蘭崖仙史」による「〔まくり〕（墨絵）」四枚があり、落款から「高原氏」であることが分かる。青木石農編『信濃画家一覧』（一九二八年）に「高原蘭崖」の名前が載るが、詳細は不明。

（12折裏）　（13折表）

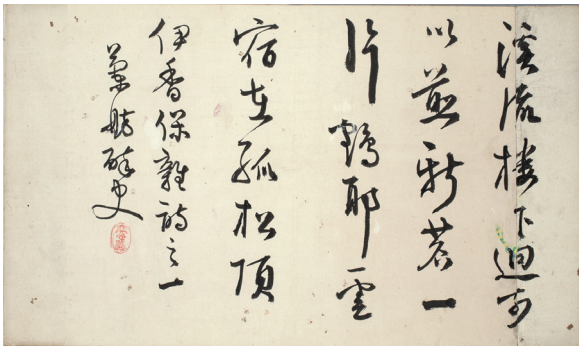
倚石疎花瘦帯風
細葉長
于時年明治十有七甲申
夏日写於伊香保客
室　蘭崖仙史
〔印〕「香世界」「桑石」

鋏香（詳細未詳）

（13折裏）　（14折表）

碧水乍開新
鏡面青山都
是好屏風
鋏香生
〔印〕「鋏香」

蘭舫（詳細未詳）



（14折裏）　（15折表）

渓流楼下廻前
以煎新茗一
片鶴耶雲
宿在孤松頂
伊香保雑詩之一
蘭舫醉史
〔印〕「憲義」

小笠原（おがさわら）　長育（ながなり）（一八五九－一八九五）

現在の福井県に生まれる。父は越前勝山藩の最後の藩主・小笠原長守。子爵。『太政官職員録 明治十七年三月改』によると、当時、長育は修史館御用掛、従五位、東京府本所区在住。その後、東宮（のちの大正天皇）侍従をつとめた。

国立公文書館所蔵「修史館御用掛小笠原長育伊香保へ出発並帰京ノ件」によると、一八八四（明治十七）年六月二日に湯治のため伊香保へ向けて出発、同月二十六日に帰京。

（15折裏）

（16折表）

満窓碧玉

〔印〕「長育」

映山（詳細未詳）

（16折裏）

（17折表）

君子佳
味
時甲申
歳夏日
写於積
善堂
映山

〔印〕「映山」

狩野（かのう）　利房（としふさ）（一八三七－一九〇七）

現在の群馬県に生まれる。神官、国学者、歌人。一八七三（明治六）年群馬県渋川の甲波宿禰（かわすくね）神社の祠掌に任ぜられ、亡くなる一九〇七（明治四十）年まで務めた。書家としても知られ榛名山麓随一と言われた。和歌にすぐれ、歌集に『くさの舎歌集』（一九三四年）があるが、「道のべの」の和歌は所収せず。

（17折裏）

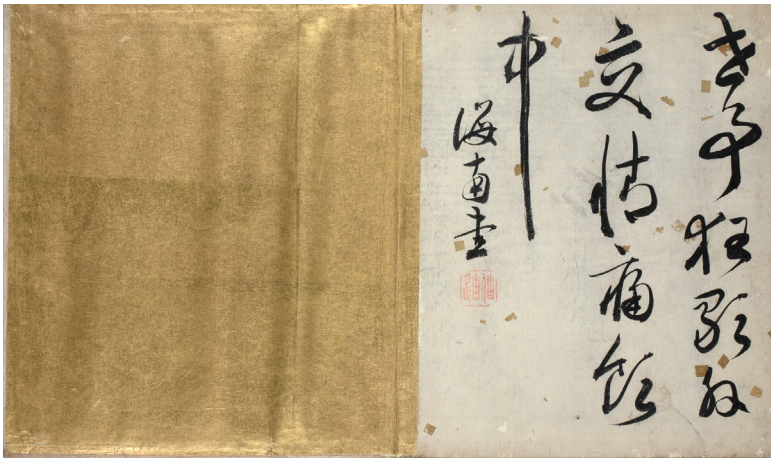
（18折表）

利房

道のべのかきねの
さくらさきしより
ゆくもかへるも
立とまりつゝ

〔印〕「高」「蕉」

藤野（ふじの） 海南（かいなん）（一八二六－一八八八）



（見返し）　（18折裏）

世事狂歌外
交情痛飲
中
海南書
〔印〕「伯廸」

漢学者。現在の愛媛県に生まれる。本名は正啓（まさひら）、海南は号、伯廸（はくてき）は字。一八七七（明治十）年、修史館編修官となり、『大日本編年史』『先朝紀略』などの編纂を行った。また、漢詩文の結社である「旧雨社」を創立した。参加者の中には、小野湖山、松岡環翠（本書三頁参照）もいた。

一八八四（明治十七）年当時、湯島に住んでいた海南は、八月三日から七日まで伊香保の島田平八の宿に、清国公使黎庶昌（一八三七－一八九七）とともに投宿。漢詩の唱和などをして交友を深めたという（石田肇「藤野海南と黎庶昌―二人の交友を中心に―」『東洋文化』八三、一九九九年九月）。

本文の「世事狂歌外交情痛飲中」は道富元礼・藤原良国編『書家自在』上巻（一八八〇年）に、中国明代の文人・梁有誉（一五一九－一五五四）の詩句として見える。

（裏表紙）

白頭帖

（表紙）

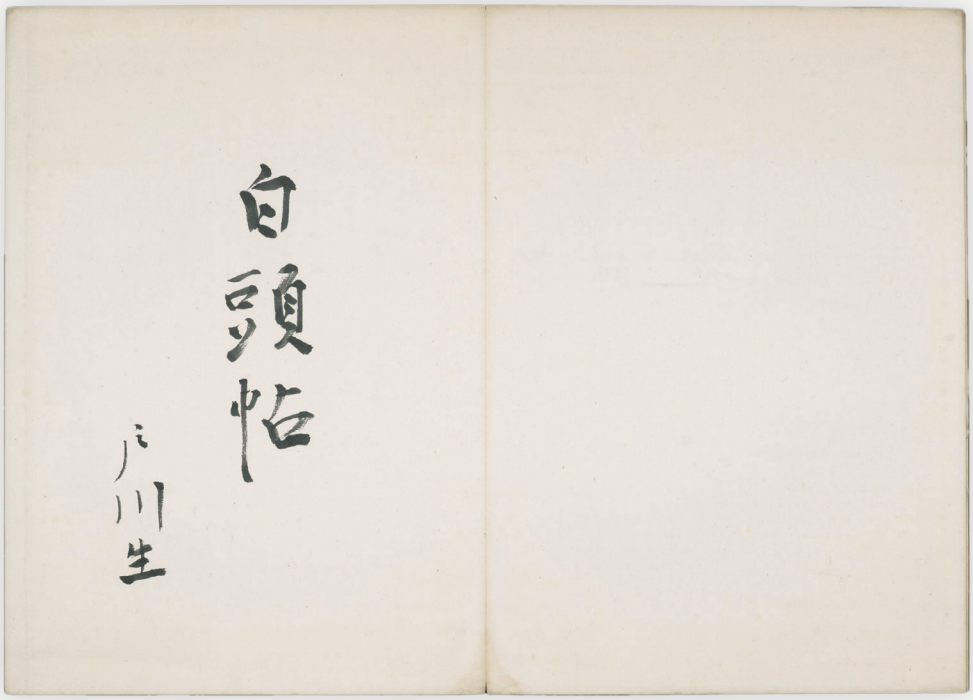
〈書誌〉

一帖　二十九折（一折表裏・二折裏・三折表・二十三折裏・二十四折表、および二十六折以降白紙）

寸法　縦三十・三cm、横二十一・二cm

外題「白頭帖」　島崎藤村筆

二〇〇六年六月二十日、松浦和春氏（松浦和平の御子孫）より寄贈



白頭帖　戸川生

（2折表）　（1折裏）

『白頭帖』について

一九二五（大正十四）年四月十四日、明治学院でともに学んだ旧友十八人による同窓会が開かれた。場所は東京芝の紅葉館。

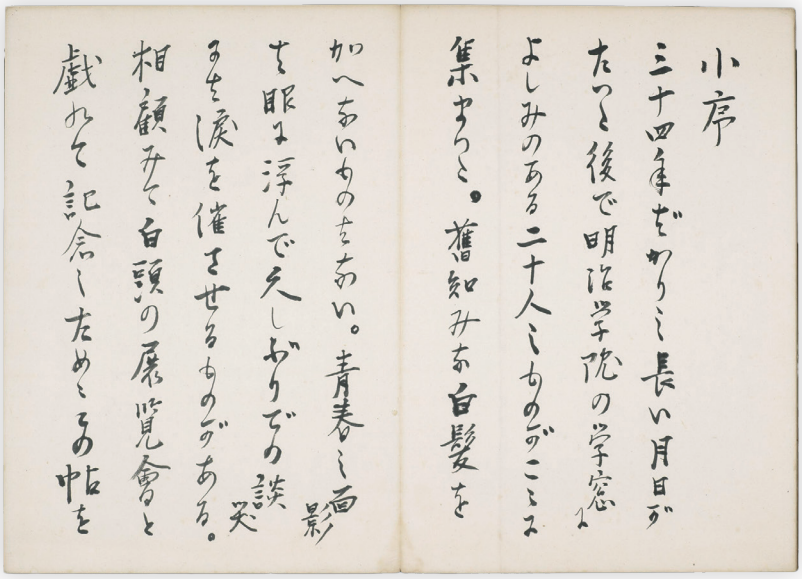
『白頭帖』は、この同窓会の席上で書かれた十八人による記念の寄せ書きである。序跋の内容によると、戸川秋骨が「白頭帖」という題を付け、和田英作が似顔絵を描き、島崎藤村が小序を、桜井鷗村が跋文をしたためた。参加人数について、藤村は二十人、鷗村は十八人と書いているが、この書画帖で確認できるのは十八人。途中で二人帰ったか、藤村が人数を四捨五入したといったところであろうか。

なお、同窓会から約四年後の一九二九（昭和四）年二月二十七日に書かれたと思われる戸川秋骨の随筆「書画帖」（本書二十七頁参照）に、同窓会とこの書画帖のことが詳しく記されている。藤村と鷗村の序跋には見えない情報について、ここに注記しておきたい。

戸川の「書画帖」によると、島崎藤村が書画帖一冊を持参し、記念のためにと一同に揮毫を求めた。そのうち、和田英作が列席者のカリカチュアを描くことになり、和田はそれぞれの顔を穴のあく程見て筆をとったという。藤村は書画帖の表書をし、序文を秋骨に勧めたが、秋骨が固辞したため、結局は藤村が序文を書いた。その後、巻尾に鷗村が跋文を記して書画帖が完成した。

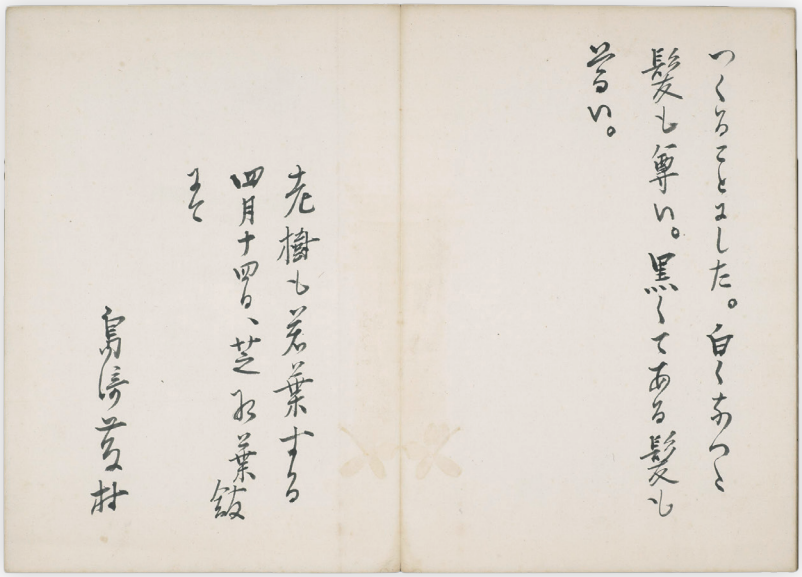
すると今度は、出来上がった書画帖をどうするか、誰の所有にするかという問題が生じた。籤引きで当たった者の所有とするが、その代わり、それを正確に印刷し複製を作って、自分以外の列席者全員に一部ずつ配るということに決まった。籤の結果、松浦和平が引き当て持ち帰ることになった。

しかし、松浦は翌年の一九二六（大正十五）年病に倒れ帰らぬ人となる。彼によって複製が配付されることは叶わなかった。二〇〇六（平成十八）年、当該書画帖はご子孫により当館へ寄贈された。



小序
三十四年ばかりの長い月日が
たつた後で明治学院の学窓に
よしみのある二十人のものがこゝに
集まつた。舊知みな白髪を

（3折裏）



加へないものはない。青春の面影
は眼に浮んで久しぶりでの談笑
には涙を催させるものがある。
相顧みて白頭の展覧會と
戯れて記念のためにこの帖を

（4折表）

つくることにした。白くなつた
髪も尊い。黒くてある髪も
尊い。

老樹も若葉する
四月十四日、芝紅葉館
にて

島崎藤村

（5折表）

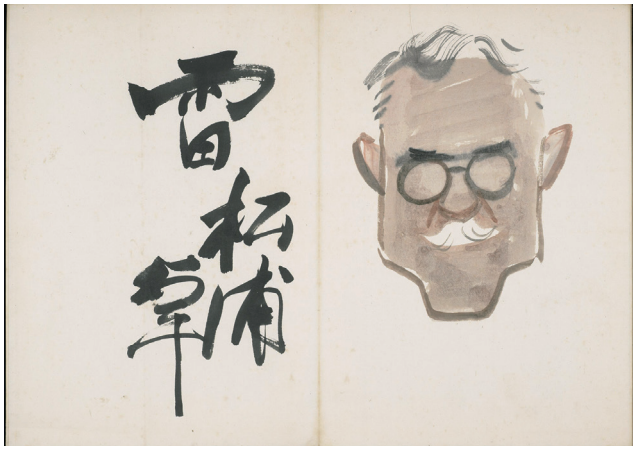
小序

三十四年ばかりの長い年月が
たつた後で明治学院の学窓に
よしみのある二十人のものがこゝに
集まつた。旧知みな白髪を
加へないものはない。青春の面影
は眼に浮んで久しぶりでの談笑
には涙を催させるものがある。
相顧みて白頭の展覧会と
戯れて記念のためにこの帖を
つくることにした。白くなつた
髪も尊い。黒くてある髪も
尊い。

老樹も若葉する
四月十四日、芝紅葉館
にて

島崎藤村

松浦　和平（一八七二－一九二六）



（6折表）　（5折裏）

雷　松浦和平

1891年普通学部卒業写真より

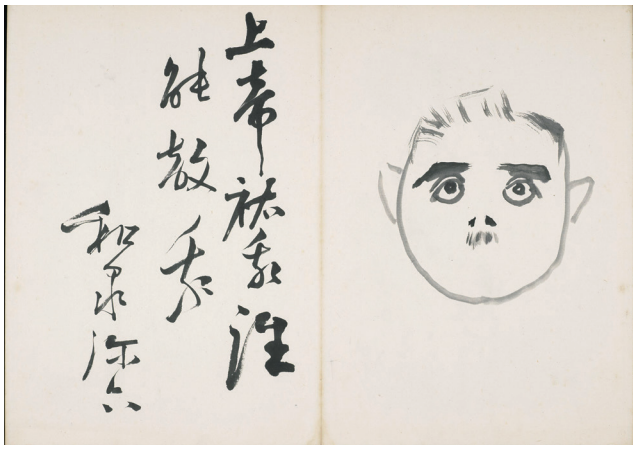
群馬県に生まれる。一八九一（明治二十四）年普通学部卒。工学博士。

明治学院卒業後、渡米し、ペンシルベニア州ウェスタン大学機械科に入学、のちにミシガン州立大学機械工学科に転学し、一八九五（明治二十八）年卒業。東京高等工業学校教授となり、一九一六（大正五）年に退官後は、化学工業に関する研究に没頭した。

当該資料のもと所有者。籤引きに当たって書画帖を所有することになり、同時に参加者への複製配付の役割も担ったが、病気のため果たすことなく亡くなった。

学生時代、しきりに大声を出して怒鳴ることから「雷」と渾名された。このことは、戸川秋骨『食後の散歩』（一九四一年）、生方敏郎『食後談笑』（万里閣書房、一九二八年）などにも記されており、島崎藤村も「松浦の雷はどこへ落ちるか知れない」（『藤村童話叢書　第一編』）とその著書に書いている。

和泉　弥六（？－一九二六）



（7折表）　（6折裏）

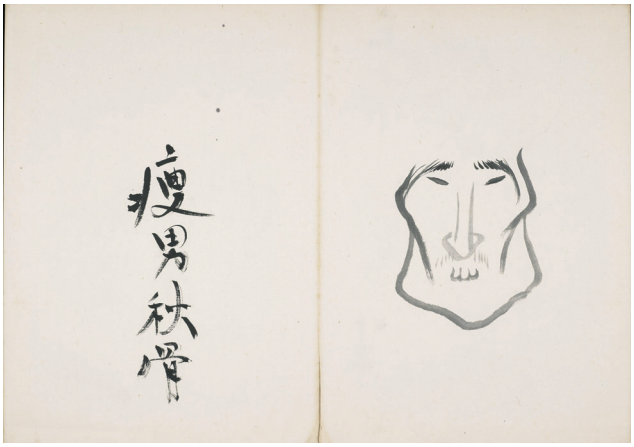
上帝祐我　誰能敵我

和泉弥六

一八九二（明治二十五）年神学部卒。長野県の南佐久講義所などで伝道に従事。また、早稲田大学商業科の講師として「英語商業作文」を担当。のちに実業家に転じ、晩年には明治学院理事も務めた。著書に『罪の価は死なり』（一八九一年）があるほか、マクネヤとの翻訳書『基督教の学術的研究』（一八九四年）、三浦徹との共編『新約全書　略註』（一九〇四年）などがある。井深梶之助の一九二六（大正十五）年一月十八日の日記には、前日に亡くなった和泉について「午後三時、昨日死去セル和泉弥六氏ノ葬儀ヘ会葬ス、同氏神学部卒業ノ後、三四年伝道ニ従事シ爾来実業界ニ身ヲ投シタル人ナリ、性質温和、親切ノ人ナリ」と記されている。

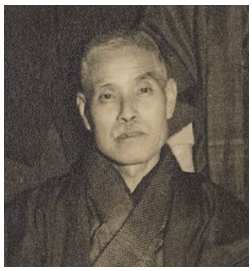
「上帝祐我…」は『新約聖書』「ローマの信徒への手紙」（羅馬書）八章三十一節に拠る。

戸川　秋骨（一八七一－一九三九）



（8折表）　（7折裏）

痩男秋骨



1932年5月撮影

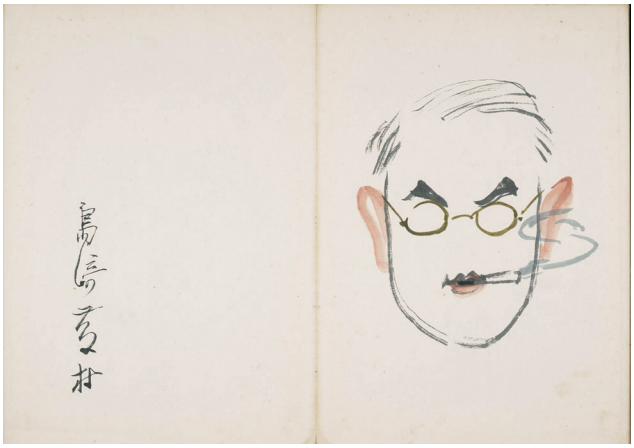
熊本県に生まれる。一八九一（明治二十四）年普通学部卒。英文学者、随筆家。本名は明三。一八九三（明治二十六）年発行の『文学界』第九号「山家漫言」から秋骨のペンネームを使う。一八九五（明治二十八）年帝国大学英文科選科に入学、翌年修了。

一九二五（大正十四）年当時、秋骨は慶応義塾大学教授を務める傍ら、明治学院や文化学院において英語の講師も務めていた。

随筆「書画帖」の中に、「見ると私の顔は能面のやうで、中にも痩男といふ面そつくりである」「私の顔は誰が描いてもこの痩男のやうになる」と記しており（本書二十七頁参照）、「痩男秋骨」は、和田英作が描いてくれた自らの似顔絵を見て抱いた感想。

藤村作詞の明治学院校歌碑建設にあたり、委員を務めた。

島崎　藤村（一八七二－一九四三）



（9折表）　（8折裏）

島崎藤村

1887年頃撮影

現在の岐阜県に生まれる。本名は春樹。一八九一（明治二十四）年普通学部卒。詩人、小説家。三田英学校（現在の錦城学園高等学校）、共立学校（現在の開成中学校）で学んだのち、一層英語を研究したいと考えていた藤村は、三田英学校での恩師江口定條（一八六五－一九四六）に相談し、明治学院への入学を決めた。入学後一、二年ほどは「学校のことなんぞ勉強して、うか〳〵と日を過した」が、「そのうち文学とか、宗教とかいふ方に心を潜めるやうになって了った」という（本書三十九頁参照）。

藤村はヘビースモーカーで知られる。「敷島」という銘柄の紙巻き煙草を好んで吸っていた。藤村に傾倒していた画家の有島生馬は、煙草を燻らす藤村について「敷島の袋からつまみ出された煙草は口に搬ばれ、煙になつてゆる〳〵と脣の間から少しづゝ出てゆく、じつとそれを眺めてゐられる事もある」と語っている（『新潮』二十六巻二号所収「静かさと深さ」、一九一七年）。

小城　徳太郎（一八七二―一九三九）

（10折表）　（9折裏）

小城徳太郎

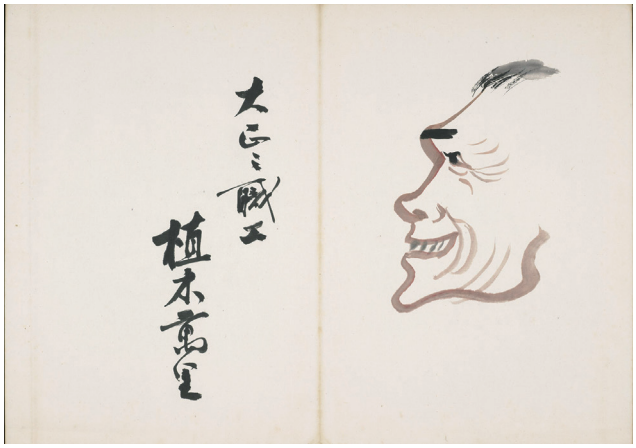
1891年普通学部卒業写真より

長崎県に生まれる。一八九一（明治二十四）年普通学部卒。一八九三（明治二十六）年慶応義塾を卒業後、三菱倉庫株式会社に入社。一九二六（大正十五）年に同社を定年退職。のちに帝国蚕糸倉庫株式会社に入り、支配人となる。

また父の興した西洋料理店三緑亭を継いで経営を行った。東京上野の芝公園内にあった三緑亭は、明治学院関係者の歓送迎会や同窓会の会場としてよく使われており、一九一七（大正六）年三月には、前年フランスから帰国した島崎藤村の歓迎を兼ねた同窓会もここで開かれている。また、徳富蘇峰が主催した文筆家の集まりである「文学会」の第一回会場としても知られる。

藤村作詞の明治学院校歌碑建設にあたり、委員を務めた。

植木　萬里（一八七一―？）



（11折表）　（10折裏）

大正之職工

植木萬里

1932年5月撮影

群馬県に生まれる。一八八九（明治二十二）年普通学部卒。卒業後は実業界に入り、欧米機械および工具製造会社特約代理店であるアンドリュース・エンド・ジョージ商会の支配人となる。日本人に欧米機械の性能や使い方を教えた植木は、雑誌『工業日本』（一九三四年三月号）において、「日本に工作機械（マシンツール）を持ち込んだ恩人」と書かれている。また「小柄であるが気骨あり熱狂的な突進性を持っている人」であったという。植木の妻は、明治時代の実業家原胤昭の次女絹子。

藤村作詞の明治学院校歌碑建設にあたり、委員長を務めた。

川村　算蔵（生没年未詳）

（12折表）　（11折裏）

川村算蔵

1893年卒業記念写真より

一八九三（明治二十六）年普通学部卒。その後、横浜商業学校に入学し、一八九六（明治二十九）年に卒業。同校嘱託教師も務める。『銀行会社職員録六版』（一九一七年）には、「三友鉱業株式会社」の取締役の一人として、また、『帝国銀行会社要録　大正十四年版』（一九二五年）には同会社の監査役として名前が見える。

久野　成七郎（一八七一―？）

（13折表）　（12折裏）

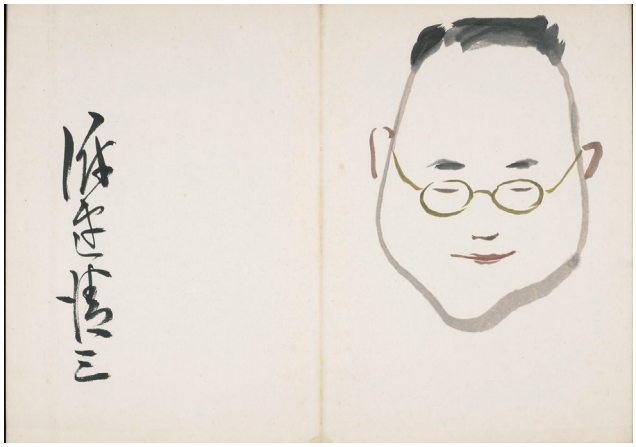
S. Kuno

1893年卒業記念写真より

和歌山県に生まれる。一八七八（明治十一）年に慶応義塾幼稚舎に入舎。のちに明治学院普通学部に入り、一八九三（明治二十六）年に卒業。翌一八九四（明治二十七）年に行われた北村透谷追悼会には、藤村・秋骨らとともに久野も来会した（『女学雑誌』三八三号）。株式会社セール商会勤務を経て、一九〇八（明治四十一）年、電気機会輸入販売を手がけるヒーリング商会に入社。一九二二（大正十一）年には満十年以上の勤続者として表頌された。

一致英和学校を一八八四（明治十七）年に卒業し、明治学院でも教鞭をとった杉森此馬（一八五八―一九三六）の喜寿の祝賀会が一九三四（昭和九）年三月二十六日に行われており、久野も参加。当日撮影された「杉森元老喜寿祝賀会記念写真」（当館所蔵）の中には、小城徳太郎、戸川秋骨、植木萬里、和田英作、山本粂太郎とともに久野の姿が見える。

渡辺　清三（生没年未詳）



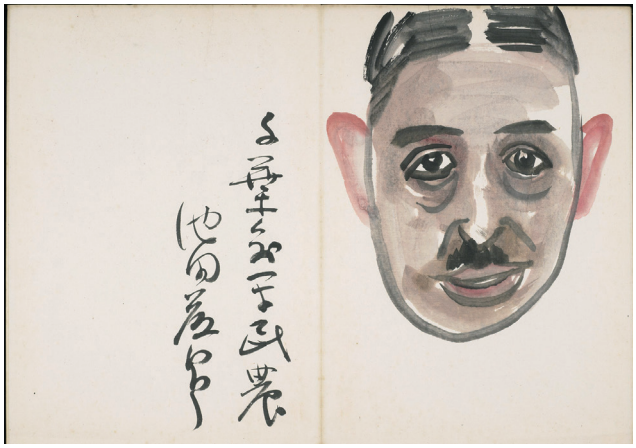
（13折裏）　（14折表）

渡辺清三

明治学院を卒業した記録は見当たらず、詳細は不明であるが、『明治学院同窓会名簿』（一九四三年三月三十日発行）二十五頁、高等学部「明治二十七年」の項に、「渡辺清三」とある。北村重昌と同窓。

一八九〇（明治二十三）年に明治学院にて開催された第二回夏期学校（基督教青年会主催）に参加。当日の来会者名簿には、渡辺のほか松浦和平、島崎藤村、桜井彦一郎（鷗村）、和泉弥六、池田藤四郎、戸川明三（秋骨）、久野成七郎など、書画帖に揮毫した八人の名が見える（木村駿吉編『精神的基督教』一八九〇年）。

池田　藤四郎（一八七二―一九二九）



（14折裏）　（15折表）

千葉県平民農
池田藤四郎

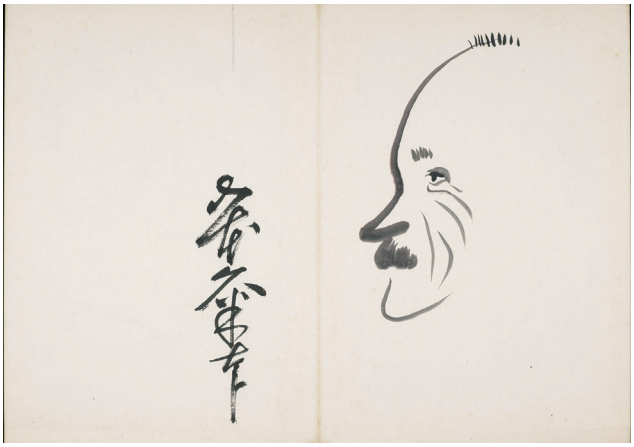
1892年集合写真より

千葉県に生まれる。一八九二（明治二十五）年普通学部卒。実業家。幼少より学を好み、上京して攻玉社で学んだ後、明治学院に入学。野球を得意とした。卒業後は自動車販売業につき、続いて大阪東洋硝子会社等に勤め、後に日本新聞に入社。『無益の手数を省く秘訣』『能率増進科学的経営法』などを著し、産業合理化運動の先駆者となった。一方、池田は、実業家石山賢吉に経済雑誌『ダイヤモンド』の発行を促した人物で、その誌名を命名したことでも知られる（石山皆男編『ダイヤモンド社二十五年史』ダイヤモンド社、一九三八年）。

頗る英語に堪能で、毎月欧米の雑誌三十種を読破していたほどであった。性格は朗らかで度量が広く、友人を大切にしていたという（『明治大正史』明治大正史刊行会、一九三〇年）。

また、島崎藤村著「旧い学窓のこと」（『春をまちつつ』所収、一九二五年）には、銀座の珈琲店で久しぶりに池田と会った時のことが記されている。

山本　粂太郎（生没年未詳）



（15折裏）　（16折表）

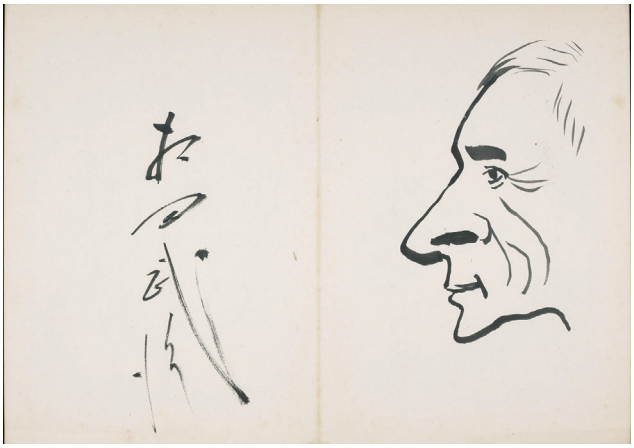
山本粂太郎

1934年3月撮影

明治学院を卒業した記録は見当たらず、詳細は不明であるが、『明治学院同窓会名簿』（一九九五年）では明治二十四年普通学部の項に、「山本粂太郎」の名が見える。小城徳太郎、島崎藤村、戸川秋骨、松浦和平らと同学年であった。

一九三四（昭和九）年三月二十六日に行われた杉森此馬の喜寿の祝賀会（前掲）に山本も参加。当日撮影された「杉森元老喜字祝賀会記念写真」の中には、小城、戸川、植木萬里、和田英作、久野成七郎とともに山本の姿が見える。

相田　武治（一八六七－一九三八）



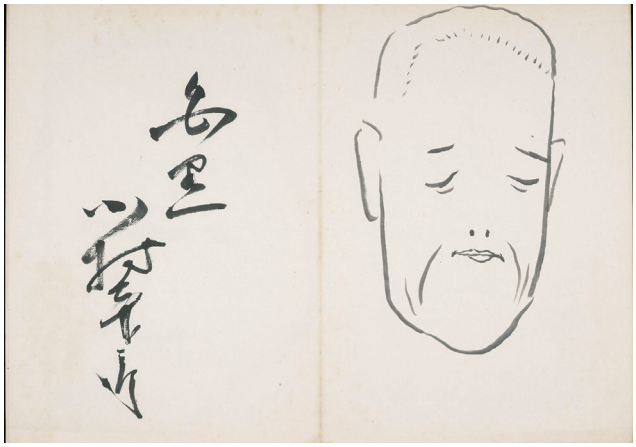
（16折裏）　（17折表）

相田武治

『東京製綱株式会社七十年史』より

佐賀県に生まれる。明治学院を卒業した記録は見当たらず、中途退学したと思われる。ただし、一九一一（明治四十四）年五月二十四日に開かれた「二十四年同級会」に参加しており（『白金学報』第二十四号、一九一一年七月）、一八九一（明治二十四）年普通学部卒業生、すなわち小城徳太郎、島崎藤村、戸川秋骨、松浦和平らと同学年であったことがうかがわれる。一九〇四（明治三十七）年に東京製綱株式会社に入社。本社の会計兼庶務掛、各地の工場長を経て、一九一七（大正六）年に退社。八坂商事を創立し、日東麻綱社長などを歴任した（『東京製綱株式会社七十年史』一九五七年）。

小村　喜三郎（一八六四－？）



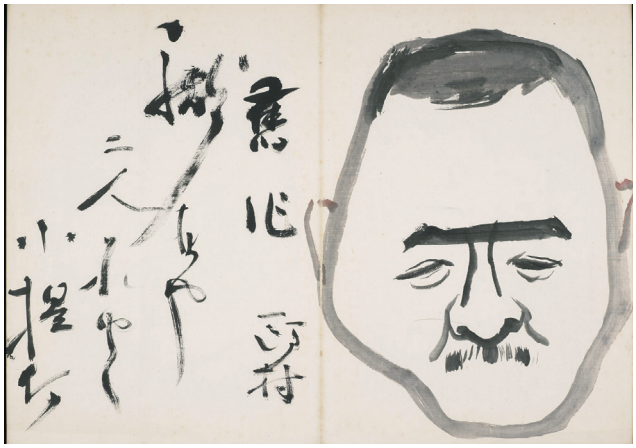
（17折裏）　（18折表）

白黒
小村喜三郎

現在の東京都に生まれる。攻玉社で学んだ後、一八八〇（明治十三）年に築地大学校に入学（ただし、一八八〇年九月十五日付「築地大学校在学証書」には「堀江喜三郎」と記載されている。後に小村姓に改姓したか）。二年後一橋予備門を経て、一八九一（明治二十四）年、日英貿易商館に入社（『京浜実業家名鑑』一九〇七年）。

明治学院との関係については詳細不明であるが、『会報』第壱号（明治学院同窓会編刊、一九一九年）所収「同窓会七年度会費領収芳名」のなかに「小村喜三郎」と見え、また『同』第四号（一九二二年）所収の名簿には「三一商会主　輸出入貿易商」として小村の名が記載されている。

桜井　鷗村（一八七二－一九二九）



（18折裏）　（19折表）

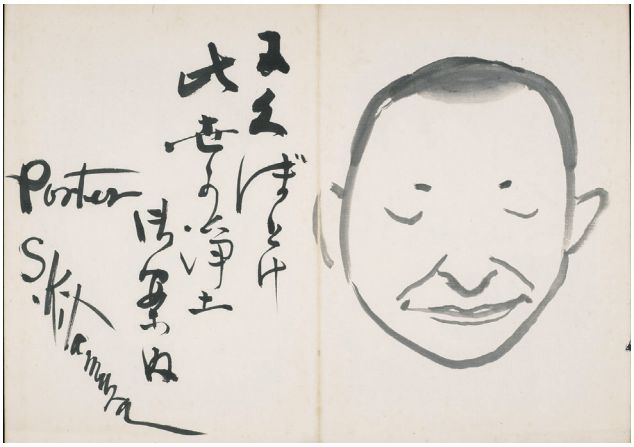
旧作　鷗村
朧夜や
二人つれゆく
小提灯

1909年3月撮影

愛媛県に生まれる。本名は彦一郎。一八九二（明治二十五）年普通学部卒。教育者、翻訳者、実業家。

明治学院在学中、文学大会で「文学上の聯想」と題する演説を行い、その原稿が巌本善治編輯の『女学雑誌』に掲載された。また、卒業式では総代をつとめた。その夜の晩餐会の席上で卒業生諸氏が将来の抱負を語った際、鷗村は「我が目的は女子教育である」と述べて会衆を驚かせたという。一八九九（明治三十二）年、女子教育視察のため渡米。帰国後は、報知新聞の記者となるが、翌年津田梅子の創立した津田英学塾（現在の津田塾大学）の幹事となり、梅子の片腕として塾の発展に寄与した。その後、一九一六（大正五）年には、実業界に身を転じ、北樺太石油株式会社の取締役を務めた（『津田英学塾四十年史』一九四一年）。

北村　重昌（一八七四－一九四五）



（19折裏）　（20折表）

にくぼとけ
此世の浄土
御案内
Porter S. Kitamura

1909年3月撮影

一八九四（明治二十七）年高等学部卒。祖父北村重威が開業し、父重礼が引き継いだ西洋料理店築地精養軒の店主（のち社長）となる。一九〇七（明治四十）年、重昌は精養軒の建物を取り壊し、一九〇九（明治四十二）年十一月に客室五十余のホテルとしたが、関東大震災で焼失。その後、株式会社として最初の社長となるも、戦災恐慌、震災恐慌のあおりをうけて経営悪化に陥る。同窓会のあった半年後の一九二五（大正十四）年十月、北村は社長を退任した（『精養軒一五〇年史』二〇二二年）。その間、一九一一（明治四十四）年にも北村の精養軒にて明治学院の同窓会が開かれており（『白金学報』第二十四号）、参加者の中には松浦和平らがいた。『明治学院五十年史』（二四八頁）によると、北村は同窓会への参加を殆どかかしたことがなかったという。

なお、一九〇二（明治三十五）年頃、北村宅には、当時十七歳だった谷崎潤一郎が書生として住み込んでいた。

一色　虎児（一八七五－一九五四）

（20折裏）　（21折表）

虎児一色

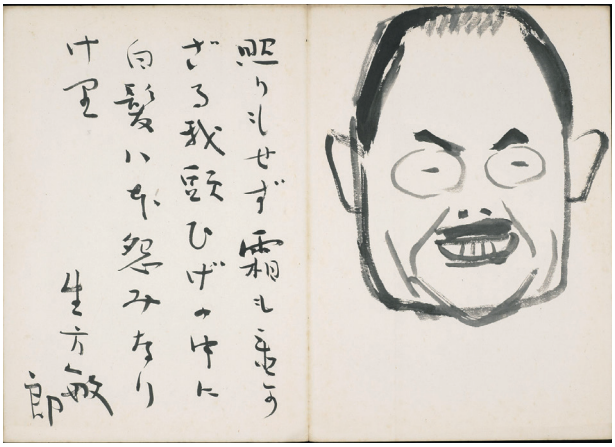
1932年5月撮影

現在の東京都に生まれる。一八九四（明治二十七）年高等学部卒。鉄道省に勤務の後、英国ロンドン大学に留学し経済学を学ぶ。帰国後の一九〇六（明治三十九）年、三井物産に入社、一九一七（大正六）年に日本製鋼所に転じた。一九三七（昭和十二）年には昭和飛行機工業株式会社を設立。

一方、明治学院同窓会の幹事長として、また第二代同窓会長として通算二十一年もの間、同窓会の発展に大きく貢献した。

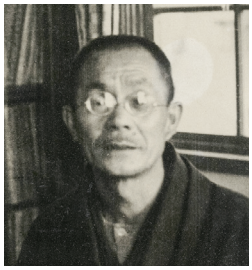
学友で画家の三宅克己（一八七四－一九五四）は「同級生で一色虎児君の名だけはよく覚えている」（佐々木邦編『明治学院生活　一九五三年版』）と語っている。

生方　敏郎（一八八二－一九六九）



（21折裏）　（22折表）

照りもせず霜も置か
ざる我頭ひげの中に
白髪八本怨みなり
けり　生方敏郎

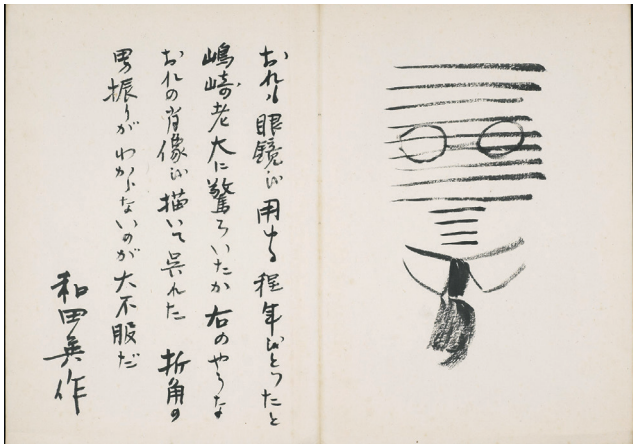


〔撮影年未詳〕

群馬県に生まれる。随筆家、評論家。一九〇二（明治三十五）年普通学部卒。その後、早稲田大学英文科へ進み、卒業後、朝日新聞記者となる。

著書『明治大正見聞史』（春秋社、一九二六年）には、当初は明治学院ではなく同志社への入学を希望していたが、新島襄が亡くなってしまったため東京で修行することにしたこと、当時、私立学校の中でもミッションスクールは評判が高く、特に本多庸一の青山学院、井深梶之助の明治学院の評判の高さは田舎まで聞こえていたこと、親戚が教師をしている青山学院に入るつもりであったが、親戚が転任してしまったため、明治学院に入ったことなどが記されている。その他、生方の著書の中には、ヘボン館の寄宿生であった学院時代についての詳細な記述も散見される。当時は八十二、三人の寄宿生がおり、彼らは折々、品川の海が一望できるヘボン館五階の物見で、神に祈りを捧げたり瞑想にふけったりしていたという。

和田　英作（一八七四－一九五九）



（22折裏）　（23折表）

おれも眼鏡を用ゆる程年をとったと
島崎老大に驚ろいたか右のやうな
おれの肖像を描いて呉れた　折角の
男振りがわからないのが大不服だ
和田英作

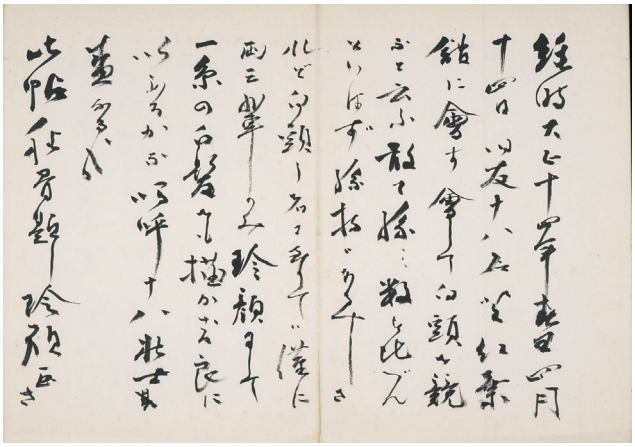
『明治学院同窓会報』より

鹿児島県に生まれる。一八八七（明治二十）年明治学院普通学部に入学。一八九一（明治二十四）年画家を志し退学。一九〇六（明治三十九）年東京美術学校教授、一九三二（昭和七）年には同校長に任ぜられた。

学生時代からの渾名は「珍顔（がん）」。学友で政治家の中嶋久万吉（一八七三－一九六〇）が記した「学院時代の和田英作君」（『明治学院同窓会報』（一九五九年三月十四日発行）には「彼はその頃自ら「珍顔」と号し、我々もまた和田君など呼ぶものはなく、「おい珍顔」で通つていた」とある。和田の葬儀は、本人の遺言により明治学院チャペルにて行われた。

和田の似顔絵を描いた藤村もまた絵には堪能であったらしく、和田は藤村に刺激されて絵画の方に深入りしたと洩らしていたという（戸川秋骨著『都会情景』一九三三年、一八九頁）。

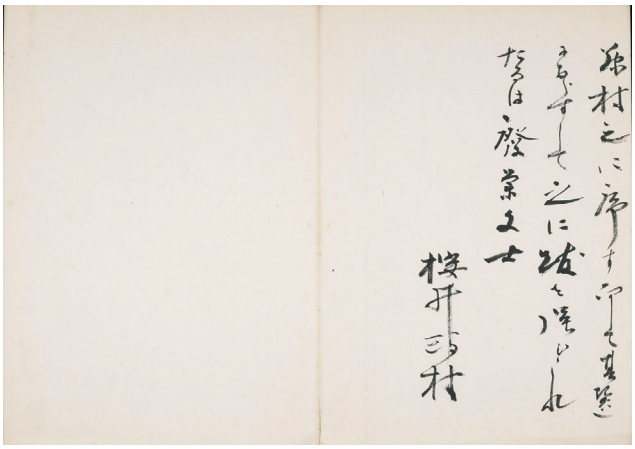
藤村作詞の明治学院校歌碑建設にあたり、委員を務めた。



（24折裏）

維時大正十四年春日四月
十四日　旧友十八名芝紅葉
館に会す　会して白頭を競
ふと云ふ　敢て孫の数を比べん
とはいはず　孫持はあるべしさ
れど白頭の者に至りては僅に
両三輩のみ　珍顔にして
一糸の白髪をも描かざる良に
以あるかな　嗚呼十八壮士
盛なる哉
此帖秋骨題し珍顔画き

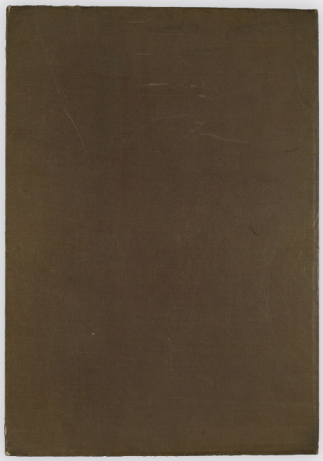
（25折表）



（25折裏）

藤村之に序す而して其選
に与らすして之に跋を強ひられ
たるは廃業文士
桜井鷗村

（26折表）



（裏表紙）

第一期普通学部卒業生とヘボン　1891年6月

前より一列目右から二人目松浦和平、二列目右から杉森此馬、T・M・マクネア、J・C・バラ、J・C・ヘボン、M・N・ワイコフ、J・M・マコーレー、石本三十郎、A・P・バラ、三列目右から一人目小城徳太郎、三人目馬場勝弥（孤蝶）、四列目右から四人目戸川明三（秋骨）、九人目島崎春樹（藤村）

書画帖とそれぞれの明治学院時代

戸川秋骨著「書画帖」より

古い同窓の会合が紅葉館で催された。外国人経営の宗教学校でほぼ時を同じうして学んだものの懐旧の会である。集まつたものは多くは実業方面で多少の功をたてたもの、若くは文学芸術界において仕事をして居るもののみであつた。不思議に私達の同窓には政治家、官吏といつたやうなものは極めて尠く、今夜もその方面に働いて居るものは一人も居ない。

島崎藤村君は大きな書画帖を一冊携へて来て居たが、それを一座の前に取り出して、何か記念すべきものの揮毫を求めた。すると、どう話しが進んだのであつたか、それは忘れたが、和田英作君が列席の人々のカリカチユアを描くといふ事に話しがまとまつた。それで和田君は一々私達の顔を、穴のあく程見ては筆を揮つた。画は勿論の事、字を書く事すらも出来ない、そしてそれを恐ろしい程に嫌ふ私はそのお蔭で大いに助かつた。見ると私の顔は能面のやうで、中にも痩男といふ面そつくりである。痩男の面といふのは、大抵は男の亡霊の仮りに現れた時に用ひられる面である。枯淡は勿論であるが、悲しい、寂しい、そして多少の凄味をもつて居る、色はいふまでもなく灰色で、華やかな処のないのは当然であるが、この世のものらしい趣もないのが、この面の特徴である。和田君の私のこのカリカチユアを見て、一同は大いに笑つた。和田君は私に気の毒と思つたか、どうも僕には、斯様見えるのだから仕方がないといつた。これは和田君の見た処が、真実である。私の顔は誰が描いてもこの痩男のやうになると、私はまた和田君の為めに弁じた。事実私の知つて居る画家が私の顔を画く時は、みなそんな風になる。も一つ、もつとずつと若かつた頃、平福百穂君が私の顔を写生した事があつたが、その時はまだ幾分若いので、痩男にはならなかつたが、却つてシワの多いのが翁の面を想はせるものになつた。孰れにしても私の顔は能面に縁がある。嘗てある人が、君がそのまま表情を作らずに舞台に出ると、面そのものを用ひたと同じになるといつた事がある、直面にもつて来いの顔と見える。又、或る時、一座の人が君は長生の相があるといつたら、他の一人がもう長生きをしたやうな顔をして居るのだと、まぜつかへした事もある。自分の顔の紹介はそれだけとして、さて藤村君は、その画帖に表書をして、中の序文を私に書けといふのであつた。私は書く事は一切願ひ下げであるといつて、固辞した。それで画帖はしばらく持ち廻されたが、たしか藤村君が親から序文を書いて、その巻尾に、何事も辞する事をせず、進んでやつて退ける、桜井鷗村君が何か一言書き連らねて、やうやく画帖は完全した。が、さてまたその出来上つた画帖をどうする、誰の所有にするといふ事が問題になつた。それにも多少いろいろな説があつたが、結局籤引きにし、当つたものの所有とする、その代りその所有者は、それを精巧な版に刷り上げて、一同に一部づつ頒つといふ事にきめられた。そして籤にした結果は、それが藤村君や私と同級であつた松浦といふ工学博士の手に落ちた。一同はその幸運を羨んだ。しかし複製を作るには丁度適当な人であつた事を喜んだ。何となれば松浦博士は当時三共の社員ではあつたが、それまでは高等工業の教授で、その方面の事に便宜をもつて居たからである。

その夜の事はそれだけで、特に他に記すべき事もなかつた。また私のここに筆を執つて居るのも、その時の事について、何事かをいはうとするためではないのである。いひたい事はこれからである。先づ第一にいひたいのは、この松浦博士の事である、いや松浦博士なんて、上下を着ては、もう面白くない、これから以下は松浦といはしてもらはう、同時に他の同窓の名も呼びすてにした方が、親しみがあると思ふから、さうする事にする。

松浦は上州長脇差の本場の産で、如何にも長脇差をしのばせる特徴をもつて居る。私の知つて居る者で、これ位元気な痛快な、そして率直な男はいない。学窓に居た時分には、かみなりといふ渾名をもつて居た。何事にもがらがらして、まるでかみなりの落ちて来たやうな趣があつたからである。

〔中略〕

話を、画帖を籤で引き当てた同窓の会のつづきに引き戻すが、その会で複製を

約束して松浦は画帖をもつて帰つて行つた。私はその複製の出来てくる日を待つて居た。しかし一向にそれは出来て来ない。その内に松浦は死んだといふ報知に接した。あの元気なあの勢の良い松浦がどうして死んだのだらうと、私にはそれが信じられなかつた。しかし松浦は死んだのであつた。元気な勢の良い松浦は死んだのであつた。〔中略〕それから後二年、三年とたつた今日、その巻尾に文字を書いた桜井鷗村も死んでしまつた。老少不定ではない、もう私達の仲間は若い処で、六十歳に近づいて居るのであるから、死んで行くのも、怪しむに足らないが、画帖に関係のあるものが、二人も倒れたのは、わけもなくただ異様に感じられる。

が、画帖の話はまだこれで終つて居ない。松浦死去の遙か後の事であつた。生方敏郎君が、私のもとへ来て、意外な話を持ち込んだ。それは××君のお嬢さんの縁談についてであつた。〔中略〕その内に××夫人が私の許を訪問されて、この縁談について何か聞きたいといはれる。私は素より予期して居た。早晩××君の方から何か話しがあるだらうと思つて居たからである。××夫人のいふには、実は松浦家を訪問したら、その応接の間に画帖があつて、それを見せられたので、一枚一枚はぐつて見て行くと、その内に貴方のカリカチユアがあつたので意外に思ひ、且つうれしかつた。松浦家の事を知るには一寸手がかりがないと思つて居たのであるに、貴方がそれほど親しくして居るとは知らなかつた。これは一つ戸川さんに聞くが一番と思つて、それをお尋ねにやつて来たのだといふのである。あの画帖がそんな役に立つたかと思ふと、私はどうも不思議に思はれてならない。その持主がなくなつて、その複製が出来なくなつて、しかもそれがこんな大事な役をなすとは、それは浅くない縁だらうと思つた。それで私はまた松浦家の事について知つて居る限りの事をよく話した。但し私は××家の事も、松浦家の事も、その奥の深い処までは知つて居ない。殊に松浦の令息なる人に至つては、記憶もない位である。ただ輪郭の上からいへば、かなり良く知つて居るつもりであつたから、それを話したのであつた。両方を相当に知つて居るといふのであるから、自分こそは真実の意味の、媒介者であると考へた。それから私は生方君に会ひ、松浦家の事を尋ねて、自分の知識の不足を補ひ、それを××家に伝へた。生方君は松浦と同郷で、学生の時分には松浦の家に宿泊して居た事もあるので、松浦の性質、夫人の如何なる人であるかを悉皆知つて居たので、これまたこの縁談の成立を少なからず望んで居たのである。私に至つては、始め××家の事を聞かれる身であつたのが、後には万事を聞きに来たその生方君について、こん度は松浦家の事を聞く身となつた。随分面白い話ではある。しかもそれがその画帖からの話であるから、一段と面白い。

『自然・気まぐれ・紀行　随筆集』、第一書房、一九四一年）所収

生方敏郎著「明治時代の学生生活」より

あの頃春は御殿山へ花見に行き、夏は青葉の下蔭に涼み、秋から冬は枯野の日向に寝転んで文学雑誌などを読むやらワーズワースやバイロンの詩集を迭み代りに朗読したりしたものだが、さう云ふ時も落花生の三角の袋を各自懐に忍ばせることを忘れなかつた。ボートを品川沖から大森の方へ漕ぎ出た時でも鈴ヶ森へ上陸して彼処の懸茶屋で葛餅や蜜豆を喰べないでは納りが悪かつた。春は大崎村へ苺を喰べに行き、秋は目黒村へ梨と栗とを喰べに行つた。クリスマスの晩に西洋人の先生から招れて、珈琲や西洋菓子の御馳走になることは、実に一年中での楽みの一つだつた。どの先生もよく御馳走して呉れた。監事からは寄宿生一同へ毎年の夏自分の畑に出来たと云ふ苺を振舞はれ、校長さんからは卒業前に必ず招かれて腹一杯御馳走になるのが、学院の年中行事になつてゐた。私は今でもその御馳走になつた喰物を喰べる毎にワイコフさんや、ランヂスさんや、井深先生や、熊野先生の俤を憶出す。

『明治大正見聞史』（春秋社、一九二六年）所収

生方敏郎著「卓上演説論」より

私は芝の明治学院を出たので、その同窓会アルムニ会に時々出席する。七十位の老人から今年卒業したての十九二十の青年迄が椅子を並べて食卓につく。そこで代る代る卓上演説をやるが、なか〳〵面白い。老人連は必ず昔話や学生時代の縮尻話（しくじりばなし）をして、皆を笑はせる。中にはその頃の渾名の披露をして笑はせる人も

ある。

例へば『工学博士の松浦和平君は雷という渾名だった。しきりに大きな声をして呶鳴るからだ。美術学校の教授和田英作君は珍しい顔をしてゐるといふので珍顔（ちんがん）、島崎藤村君は青竹の欄干（らんかん）といふ。それはすれっからしだからといふのだ。』

すべてこんな調子である。現文壇の元老藤村さんも青竹の欄干など、言はれた若い時代があったかと思ふと、一座の青年にとっては面白い昔話だ。そして、その場に島崎さんが顔を赤くし、困った様子をしてゐるのを見れば益々面白い。かういふすつぱ抜きが遠慮なくどし〳〵出て来るに従ひ、今や会社の重役となり、又は芸術界の大家となってゐる老人連も若返ってはしゃぎ出す。

『食後談笑』（万里閣書房、一九二八年）所収

島崎藤村著「学生時代の戸川秋骨君」より

戸川君はその晩年にユウモリストとしてのステイヴン・リイコツクのことなど引合に出して物を書いたやうな人で、諷刺百出、時には随分思ひきつた皮肉も言はれたが、それでゐて多くの人に愛された。さういふ人柄は君が青年時代からあらはれてゐて、年寄からも子供からも好かれたやうな人であつたと思ふ。

学院時代と云へば、わたしたちのクラスとてさう取り立て、云ふほどの特色もなかつたが、一体に皆の気がそろつてゐたそんなところから、各自思ひ〳〵の気質を延ばして行かれもしたしまた学窓を巣立つてからも種々な方面に出て働く人物を養ひ得たかと、今になつていろ〳〵想ひ当るふしも多い。年齢から言へば、わたしたちクラスのものは随分不揃ひで、当時としてはその不平均も止むを得なかつたから、戯れに「お爺（とう）さん」と呼ばれるほどの年頃の生徒もまじつてゐたが、一学級としての学生の数もさう多くなく、時に増減はあつても二十四五名を超えなかつたことが、いろ〳〵の意味でわたしたちのために好かつたかとも考へられる。〔中略〕

故ランヂス教授が米国からの赴任も、わたしたちが二年生の頃のことであつたやうに記憶するが、同教授の精緻な学風と熱意とはいつの間にかクラスのもの、敬慕の的となり、夫人もまた学生を愛して有志のものに独逸語の初歩を授けて呉れた。戸川君が独逸語の素養も先づ教授夫人から受けたものがその土台となつたくらゐである。英語の方面で忘れがたいのは、井深梶之助（井深梶之助）、石本両（石本三十郎）先生から受けた訳読で、殊にわたしたちが四年生時代に英文学選集訳読の時間を受持つてゐられた井深先生が的確で軽妙な訳しぶりには、ほと〳〵感じ入つたものであつたが、戸川君とてもあの講義に得るところも多かつたであらうと思ふ。わたしもまだ少年期から青年期に足を踏み入れたばかりのやうな年頃であつた証拠には、同期卒業生の一人としてあの白金の丘の上に紀念の楠の若木を植えたのが漸く自分の二十歳の時であつた。四年の学院時代、その間に学友諸君から啓発されたことその他机を並べた友達一人々々に就いての思ひ出など、それからそれと胸に浮かんで来ることも多いが、殊に馬場君（馬場孤蝶）と戸川君とは学院卒業後も相携へて雑誌「文学界」に関係した間柄である。人生に限りあることを今更のやうに思はせられたのも、この旧友の死であつた。

『明治学院時報』第八十六号（一九三九年八月二十日発行）所収

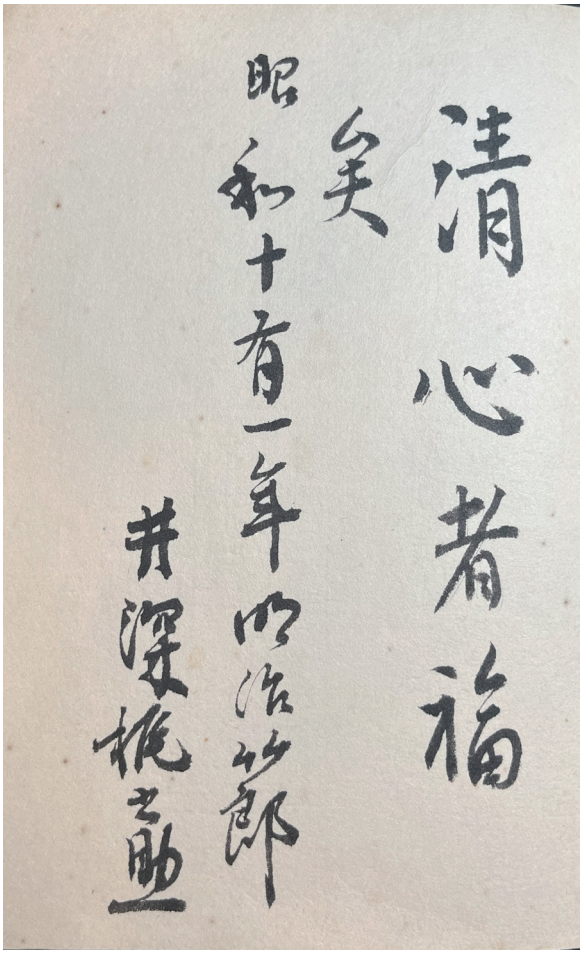
沖野岩三郎著「小諸なる古城のほとり」より

和田英作氏のお父さまの秀豊氏は、八十六歳まで健全でゐた牧師であるが、英作氏を牧師にするつもりで明治学院へ入れたのである。然るに絵ばかり描いてゐるので、非常に心配したお母さんは、或日のこと同級生の有馬純清氏に、『英作は絵かきになりたがつてゐるが、あなたから、それだけはやめるやうに忠告してやつてくれ。』と、涙を流して頼んだ。有馬氏は和田母堂に同情して、翌日学校へ出席した時、その話をして、『お母さまが、あれほど心配してゐるんだから、君も写生などするのは、やめた方がよからう。』と、言つた。すると和田氏は『うん、うん』と、言ひながら、忠告してゐる有馬氏の痩せた顔を見事に写生してしまつたのであつた。

こんな両人は、たうとう明治学院を出て、大野幸彦氏の画塾に入つてしまつた。そこには矢崎千代二、中沢弘光、岡田三郎助といふやうな大家の雛がゐた。

『宛名印記』（美術と趣味社、一九四〇年）所収

井深　梶之助（一八五四－一九四〇）



『芳名簿』より　1936年

清心者福矣

昭和十有一年明治節　井深梶之助

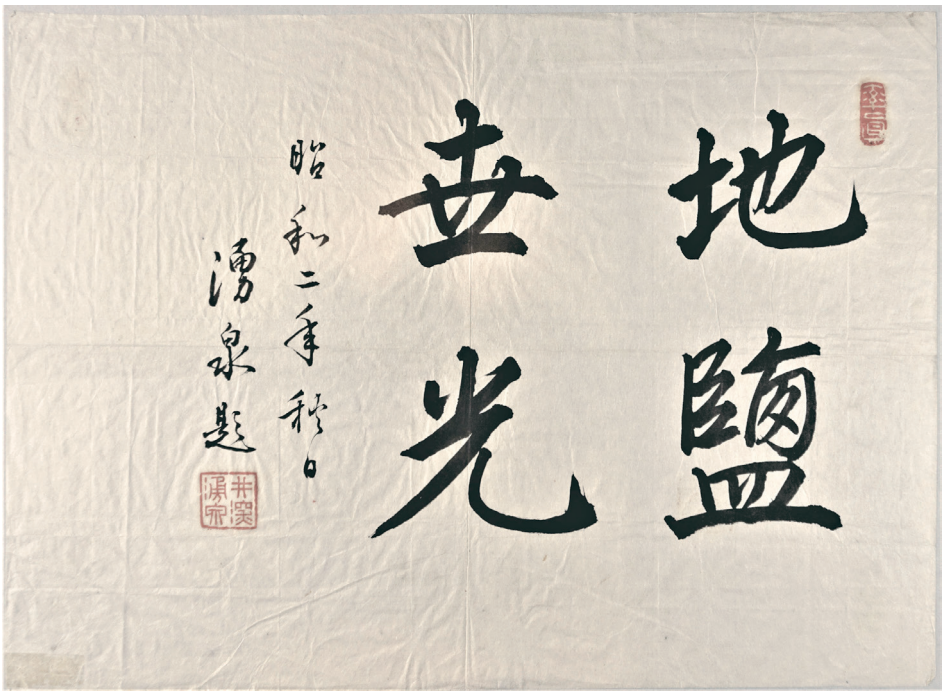
明治学院第二代総理。教育者。現在の福島県に生まれる。

図版は、明治学院旧職員高橋義博氏より一九八三（昭和五十八）年に学院へ寄贈された『芳名簿』に見える井深の揮毫。一九三六（昭和十一）年明治節に書かれたもの。明治節とは昭和前期の祝日で、現在の文化の日（十一月三日）にあたる。

『井深日記』によると、井深はこの日、明治学院長事務取扱であったホキエの求めにより、明治学院創立記念式において演説を行っている。演説の内容は『明治学院商高時報』第五十二号（一九三六年十一月）に掲載。

『芳名簿』は「昭和三年十一月十三日　人生と能率と題して高等商業部学生のために講演したる記念に」と書かれた産業心理学者・上野陽一（一八八三－一九五七）の揮毫から始まり、一九七九（昭和五十四）年九月の明治学院第七代学院長・武藤富男（一九〇四－一九九八）の揮毫で終わる。ほかに賀川豊彦や河井道子など、計五十七名の揮毫を含み、中には講演や礼拝での説教の後に書いたことを示す詞書が添えられている。

「清心者福矣（心の清い人は幸いである）」は、漢訳聖書「馬太伝福音書（マタイによる福音書）」五章八節に拠る聖句。聖書では、このあとに「以其将見神也（その人たちは神を見る）」と続く。井深がよく揮毫し人に贈った聖句の一つであり、二〇二一（令和三）年、東京都港区白金台にある瑞聖寺内明治学院墓所に建立された井深夫妻の記念碑にも刻まれた。



地鹽世光
昭和二年秋日　湧泉題
〔印〕「率真」「井深湧泉」

半紙　1927年

上の図版は、鷲山弟三郎著『明治学院五十年史』（一九二七年）掲載のために井深が揮毫したもの。ただし、『井深日記』一九二七（昭和二）年十月九日および十日条によると、五十年史に寄せる揮毫につき、当初、候補として「地鹽世光」（「マタイによる福音書」第五章十三～十六節に拠る聖句）のほかに「天国猶芥種」（「同」十三章三十一節に拠る聖句）があったことがわかる。経緯は不明であるが、最終的には「地鹽世光」が採用された。「湧泉（ゆうせん）」は井深の雅号。

この「地鹽世光」も、井深が晩年よく書いた聖句の一つで、学院内の教室にも井深が揮毫した扁額が飾られていたことを卒業記念写真帳（下の図版）から知ることができる。

明治学院高等商業部「第九回卒業記念写真帳」より　1929年

揮毫、発見！

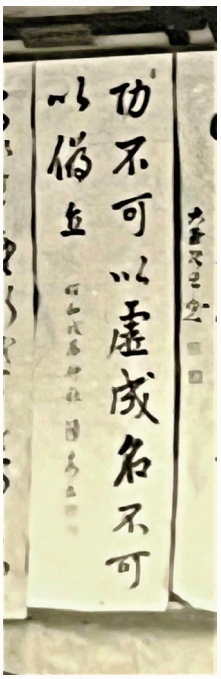
ここでは、前頁左下の写真のように、卒業アルバムの中に見える井深の揮毫を紹介したい。

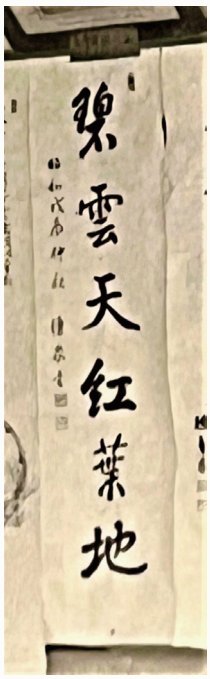
『井深日記』によると、一九二八年（昭和三）年十月、井深は明治学院高等商業部主宰全国書道展覧会に揮毫を三点出品しており、日記の十月二十九日条には、次のように書かれている（揮毫内容に傍線を補った）。

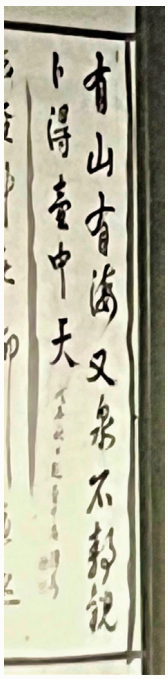
明治学院高等商業部主宰全国書道展覧会ヘ参考品トシテ揮毫半截三枚ヲ出ス、一ハ功不可以虚成名不可以偽立ノ十二字、二ハ碧雲天紅葉地ノ六字、三ハ有山有海又泉石静観ト得壺中天ノ十四字ナリ

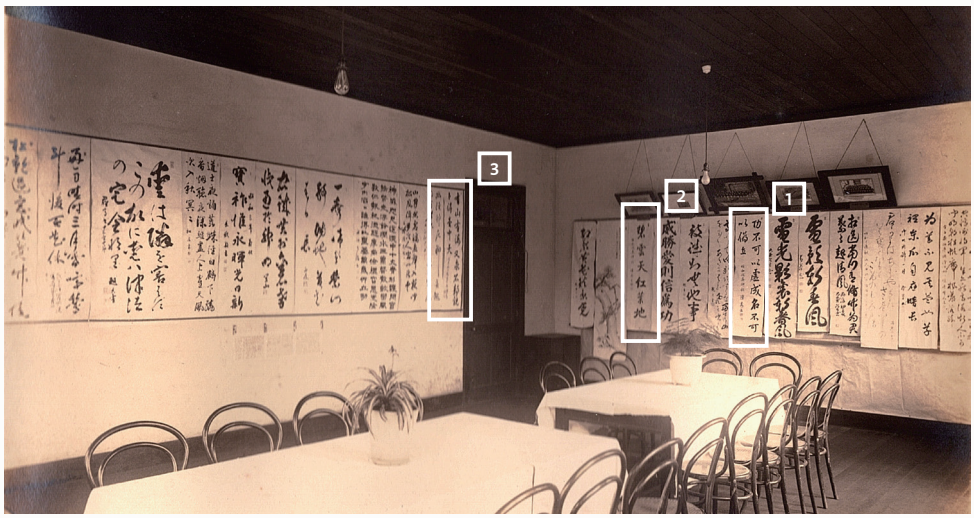
井深が揮毫した半載三枚の原物については現在のところ所在不明であるが、当時の卒業アルバムに写り込んでおり、写真では落款等判読困難な部分もあるものの、内容と筆跡から井深の揮毫とみて間違いない。

二日後、明治学院構内で行われた展覧会を鑑賞に出掛けた井深は、その日の日記の中で「陳列ノ仕方ガ乱暴ニテ唯ベタベタト並ベタ丈ノコト故相当ノ者モ見栄セズ」「陳列法ヲ大ニ改善スルノ必要アリ」など少々不満をもらしている。

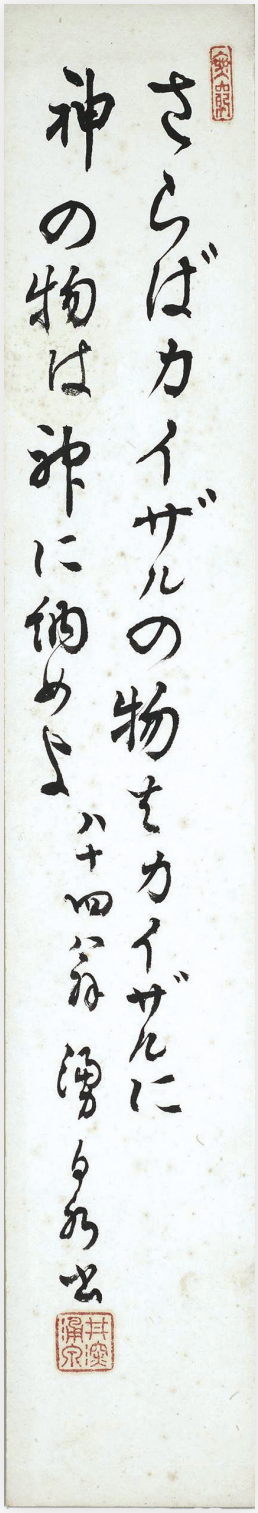








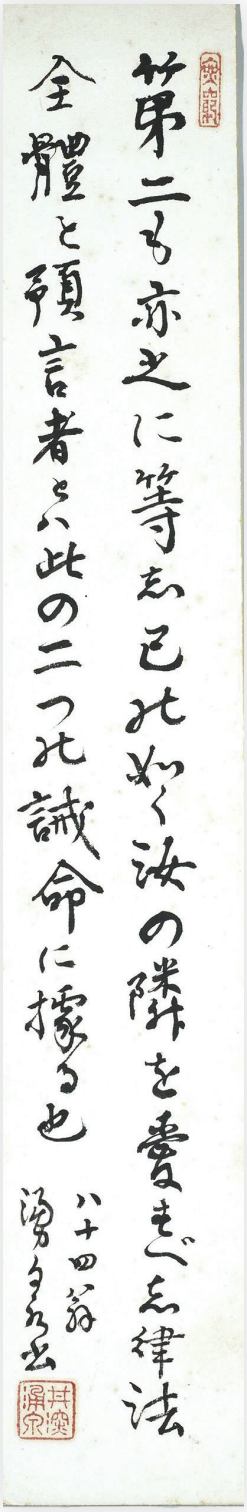
〔卒業アルバム〕「明治学院高等学部創立十周年記念写真帖帳」（1928年）より



さらばカイザルの物はカイザルに神の物は神に納めよ　八十四翁　湧泉書

〔印〕「無窮」「井深湧泉」　＊『新約聖書』「マタイ伝」第二十二章二十一節

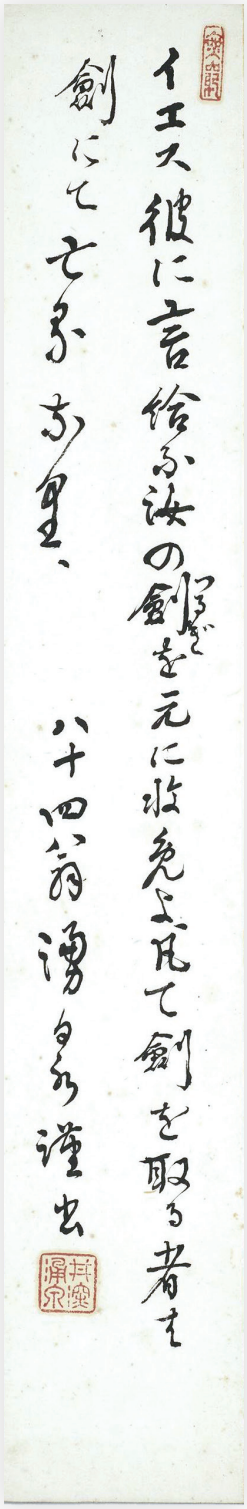
短冊　1937年



第二も亦之に等し己れの如く汝の隣を愛すべし律法全体と預言者とハ此の二つの誡命に拠る也　八十四翁湧泉書

〔印〕「無窮」「井深湧泉」　＊『新約聖書』「マタイ伝」第二十二章三十九～四十節

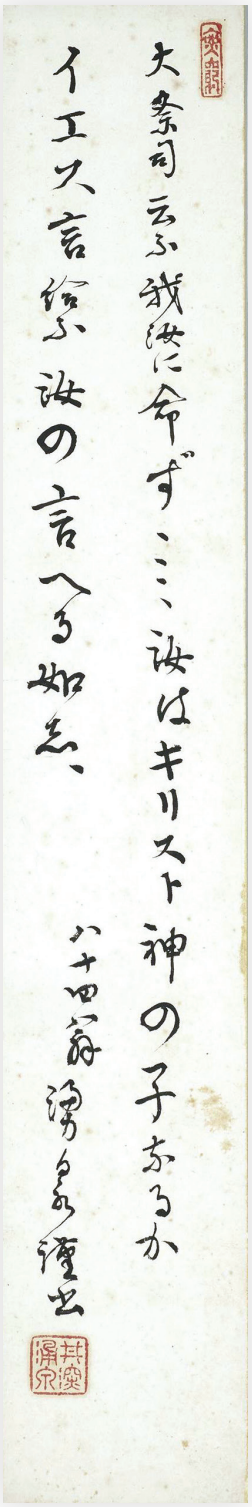
短冊　1937年



イエス彼に言給ふ汝の劍（つるぎ）を元に收めよ、凡て劍を取る者は劍にて亡るなり、　八十四翁湧泉謹書

〔印〕「無窮」「井深湧泉」　＊『新約聖書』「マタイ伝」第二十六章五十二節

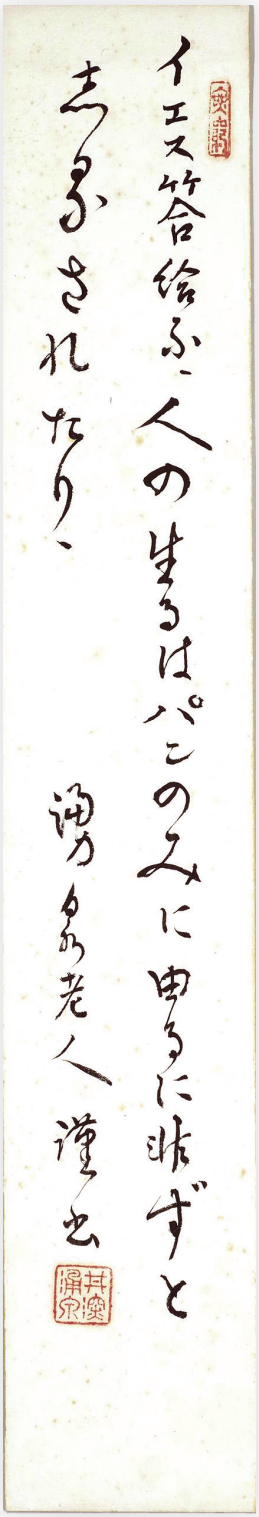
短冊　1937年



大祭司云ふ我汝に命ず、、、汝はキリスト神の子なるかイエス言給ふ汝の言へる如し、　八十四翁湧泉謹書

〔印〕「無窮」「井深湧泉」　＊『新約聖書』「マタイ伝」第二六章六十三～六十四節

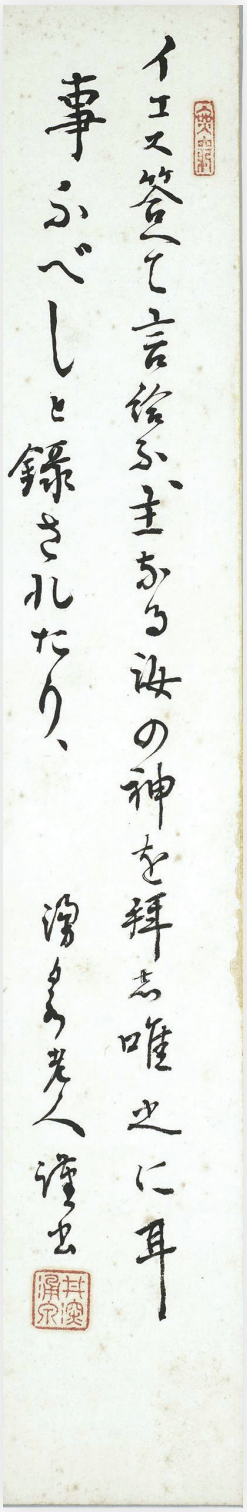
短冊　1937年



イエス答給ふ、人の生るはパンのみに由るに非ずとしるされたり、　湧泉老人謹書

〔印〕「無窮」「井深湧泉」　＊『新約聖書』「ルカ伝」第四章四節

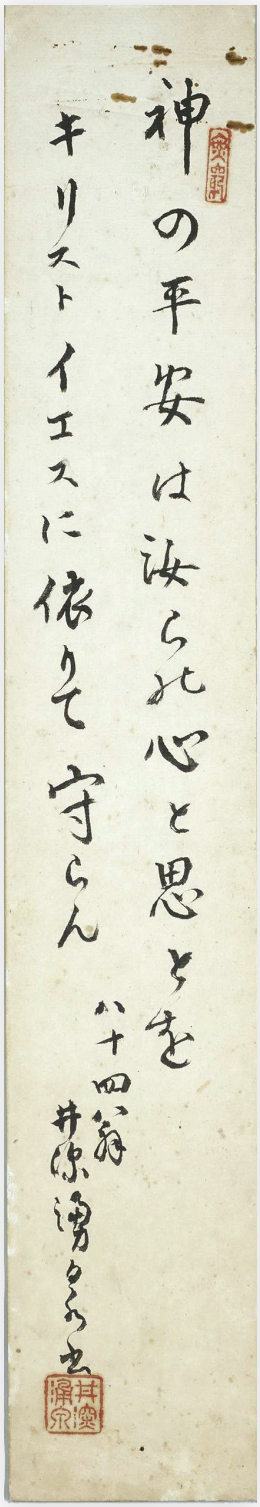
短冊〔年未詳〕



イエス答へて言給ふ、主なる汝の神を拜し唯之に耳事ふべしと録されたり、　湧泉老人謹書

〔印〕「無窮」「井深湧泉」　＊『新約聖書』「ルカ伝」第四章八節

短冊〔年未詳〕



神の平安は汝らの心と思とをキリストイエスに依りて守らん　八十四翁井深湧泉書

〔印〕「無窮」「井深湧泉」　＊『新約聖書』「ピリピ書」第四章七節

短冊　1937年

井深梶之助の聖句揮毫と奉仕

井深は明治学院を退職後、本格的に書道を学び始める。その経緯については、一九二九（昭和四）年の『井深日記』の末尾に、井深自身が書き記しており、その内容を要約すると次のようになる。

少年の頃より習字に興味を持っていたが、十五才の時戊辰戦争となり、九死に一生を得るも、その後は学資もなく、書法を学ぶ余暇もなく過した。かぞえ年七十歳となった一九二三（大正十二）年には大病を患い、自らも含め誰もが再起を疑ったが幸いにして回復した。静養するにあたり、ある人から習字を始めてはどうかと勧められた。そこでフェリス和英女学校（現在のフェリス女学院）などで習字を教えていた友人の秋葉省像に学ぶことにした。

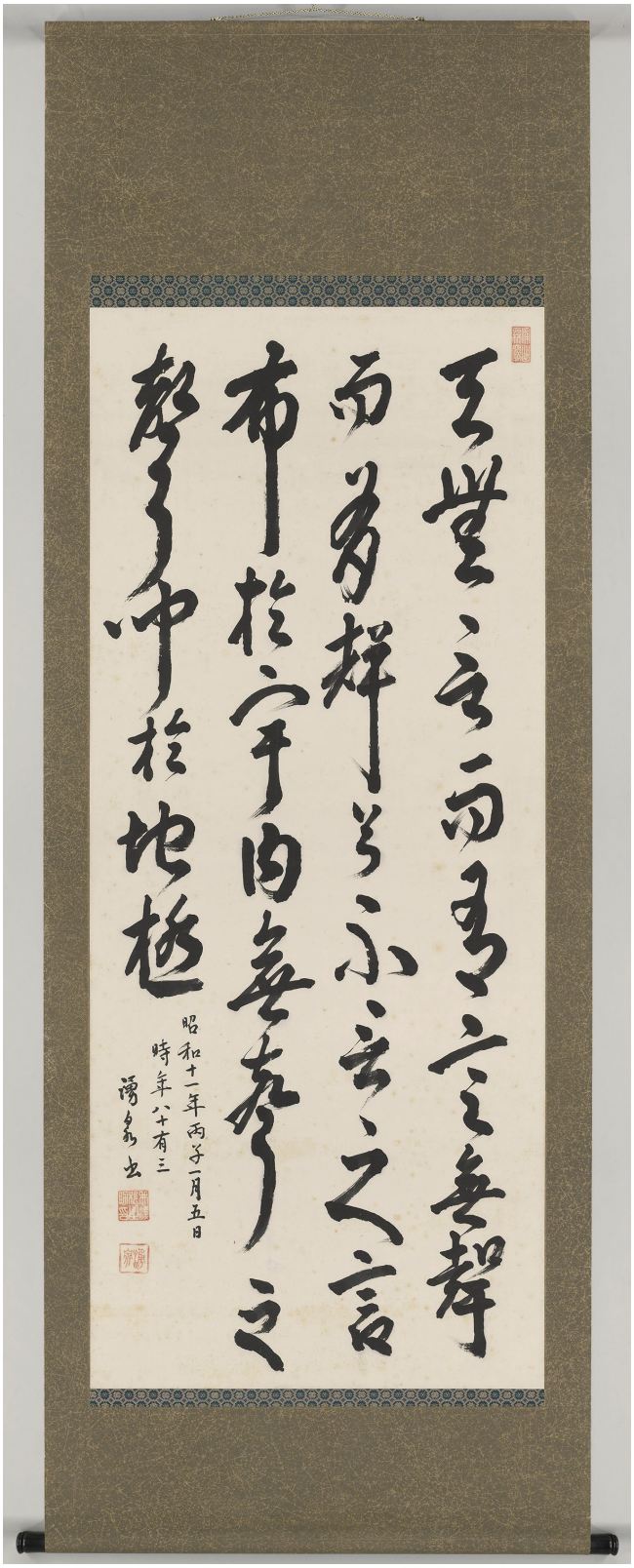
『井深日記』によると、一九二四（大正十三）年五月二日、週一回の書道教授を秋葉に頼み快諾された。井深は「丶」の打ち方から習い始め（同年五月十六日条）、時間があれば足繁く秋葉のもとに通い書道にいそしんでいる。一九二五（大正十四）年九月二日、雅号につき秋葉の意見を求めたところ、「ヨハネ伝」第四章十四節に拠る「湧泉」または「涌泉」がよいだろうと薦められ、雅号をこれらに定める。また秋葉からは、人の依頼に応じて揮毫するよう、上手になって揮毫しようというのは間違いであると言われる。

一九二六（大正十五）年三月二十九日、井深は初めて人のために揮毫し落款した。当日の日記には、「漸ク文字ラシキ書ガ出来ルヤウニ成」ったことと、秋葉の指導への感謝を記している。

以降も「何トカシテ時ニ臨ンデ聖句ヲ自由ニ揮毫シテ見苦シカラヌダケニ成リ度モノ也」（一九二九（昭和四）年十一月二日条）との希望を日記にしたためつつ、日々稽古に励み、依頼があれば掛軸や短冊、色紙に揮毫し人に贈った。実際、『井深日記』一九三六（昭和十一）年四月二十日条には、「益富氏ヘ先般依頼ノ聖句短冊十四枚ト聖句色紙二枚ヲ贈ル」と見える。また、一九三〇（昭和五）年十一月から十二月にかけての日記の内容からは、東京朝日新聞社が主催した歳末の慈善活動のために揮毫を提供した様子もうかがえる。

各方面からの依頼に応えて聖句等を揮毫する行為は、井深自身が日記（一九二九年五月三十一日条・同年六月一日条など）に「之レモ奉仕ノ一ツ」と記しているように、他者への「奉仕」そのものであった。

井深が好んで揮毫した聖句は、本書でも紹介した「清心者福矣」（三十頁）、「地鹽世光」（三十一頁）、「天無言而有言無声而多声兮不言之言布於宇内無声之声聞於地極」（三十六頁）など漢訳聖書によるものも多い。



天無言而有言無声
而多声兮不言之言
布於宇内無声之
声聞於地極

昭和十一年丙子一月五日
時年八十有三　湧泉書

〔印〕「湧水無窮」「井深梶之助印」「湧泉」

＊『旧約聖書』「詩篇」十九篇三～四節

掛軸　1936年

井深梶之助所用印一覧

印影

さまざま

湧泉
7.7 × 7.7 cm

井深湧泉
2.0 × 2.0 cm

井深梶印
3.1 × 2.9 cm

壷中菴
3.1 × 2.8 cm

湧泉
3.0 × 3.0 cm

湧泉
4.1 × 4.1 cm

湧泉
1.2 × 1.2 cm

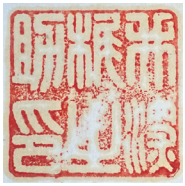
井深湧泉
1.4 × 1.4 cm

井深梶之助
3.0 × 3.0 cm

井深
1.2 × 1.2 cm

湧泉
4.0 × 4.0 cm

湧泉＊
2.4 × 2.4 cm


井深梶之助印
4.1 × 4.1 cm

井深梶之助印
4.1 × 4.1 cm

井深梶之助＊
2.5 × 2.4 cm

井深蔵書
3.0 × 2.9 cm

率真
2.3 × 1.0 cm

清徴如水晶
4.3 × 1.7 cm

湧水無窮
4.8 × 2.5 cm

無窮
1.8 × 0.5 cm

和而不流
3.0 × 1.2 cm

淡如水＊
2.6 × 1.0 cm

＊は明治学院大学図書館所蔵資料に見られる印影
寸法は縦×横

現在、明治学院歴史資料館では、井深が使用した落款印四点を所蔵している。その印影が最上段四点。これら以外にも、明治学院歴史資料館所蔵資料と明治学院大学図書館所蔵資料の中には、井深が所蔵していた落款印、関防印および蔵書印の印影が、現在のところ、それぞれ十一点、六点、一点認められる。

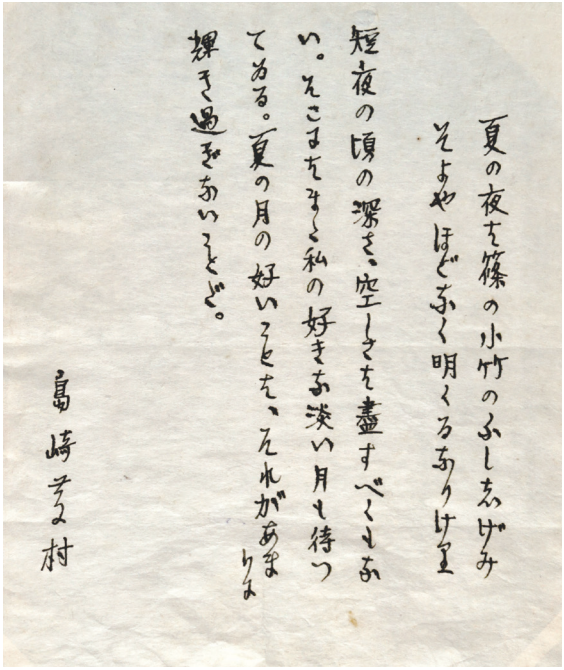
井深は晩年、書道に親しみ、掛軸・色紙・短冊などに多くの揮毫を残している。『井深日記』によると、井深が人のために初めて揮毫し落款したのは一九二六（大正十五）年三月のこと。落款印については、前年の一九二五（大正十四）年九月、横山砂（一八六七－？）に篆刻（木や石などの材料に、文字を彫りつけること）の依頼をし、同年十一月に出来上がってきた。井深は日記に「美事ナリ」と記しており、その後も横山に篆刻を依頼している。

横山砂は、現在あまり知られていないが、大正年間には日本基督教青年会同盟が発行する雑誌『開拓者』の編輯にも携わり、日本基督教青年会の実務委員として庶務を務めていた人物である。『新撰漢文異同弁』『新撰英語異同弁』などの著作もある。一方で当時は能書家としても知られており、北茨城市にある佐波波地祇（ちぎ）神社の碑文なども残した。

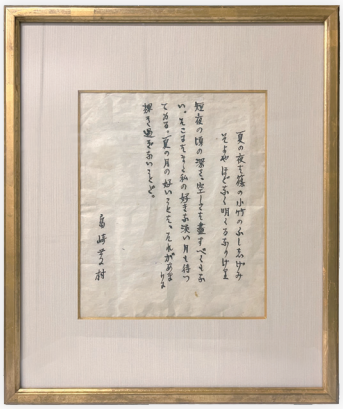
関防印については、明治学院の書道講師であった岡見正（一八五五－一九四四）に依頼していたことが『井深日記』から分かっている。

印に彫られた文字もまた先人の「筆のあと」である。

島崎　藤村（一八七二－一九四三）



本紙部分



額装〔年未詳〕

夏の夜は篠の小竹のふししげみ
そよやほどなく明くるなりけり

短夜の頃の深さ、空しさは尽すべくもない。そこにはまた私の好きな淡い月も待つてゐる。夏の月の好いことは、それがあまりに輝き過ぎないことだ。

島崎藤村

冒頭の「夏の夜は」の和歌は西行（一一一八－一一九〇）の家集『山家集』所収歌で、あとの四行も含めて島崎藤村著「短夜の頃」（『市井にありて　感想集』岩波書店、一九三〇年）の一節である。この西行の和歌は藤村にとって思い入れのある一首だったのだろうか、一九二八（昭和三）年七月十五日付の妻静子への手紙の最後に添えられている（『妻への手紙　藤村　静子よりの手紙を添えて』岩波書店、一九六八年）。また、この西行歌が書かれた藤村筆の短冊も残されている（多賀博著『短冊覚え書』朝日新聞社、一九五五年）。

藤村は少年時代から松尾芭蕉（一六四四－一六九四）の作品を愛読しており、芭蕉の言葉「古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよ」（『許六離別の詞』）によって、藤村自身もまた芭蕉の求めたものを求めた。その結果として、芭蕉が敬慕した西行の作品も読むようになる。このことについて、藤村は著書『飯倉だより』（アルス、一九二二年）所収「文学に志した頃」の中で次のように書いている。「私は少年時代から芭蕉が好であった。〔中略〕あの『奥の細道』や『笈の小文』や『幻住庵の記』なぞは少年の昔から何程愛読したか知れない。私は又、芭蕉が好きだといふ丈のことには満足しないで、芭蕉の求めたものを求めようと志して行つた。そんな風にして次第に西行の『山家集』や『撰集抄』を読むやうになり、李白や杜甫の詩集などをも愛読するやうな青年になつた」。

島崎藤村の明治学院時代

島崎藤村著「明治学院の学窓」より

私は十七から二十までの間を、明治学院の学窓で送つた。学院のあるところは、白金今里町で、今は町が出来たり、人家が殖えたりして居るが、私の居た時分は、樹木の多い、静かな場所で、御殿山なども、その時分は開放されて、自由に出入することが出来たので、学校で勉強する余暇には、よくあの辺の谷間（たにあひ）やら、丘やら、樹蔭の多い道などを歩いたものだ。自然といふものが、私の眼に映り始めたのも丁度其時分であつた。その界隈の静かな景色は、今も猶私の脳裡に忘るべからざる印象を残して居る。

〔中略〕

私は神田の共立学校から、明治学院の方へ行つた。その学校へ入るやうになつたのは、少し訳がある、それは私の少年の時分からよく世話をして呉れた同郷の先輩で、吉村忠道といふ人があつて此の人は日本橋大伝馬町の『勝新』といふ針問屋の顧問役のやうなことをやつて居た。その吉村さんが、針問屋へ私を養子に世話して、亜米利加へ西洋針の製造を見習はせにやらうといふことを思つて居た。尤も私に対しては、貴様の勉強時代には洋行さしてやる伝手（つて）がないでもないからといふやうなことであつた。私は野心深い少年であつて、殊に其頃は単純な政治思想が青年の間にも盛んであつたといふ時代であつたから、自然と政治家にならうといふ考へを抱いて居た。それで、外国の方へでも行かれて向うの文明国の土を踏んでみたいといふ考が、私の幼稚な頭を支配して居たのである。そんな事情で私は針製造人の候補者として、自分は又少しも知らずに、明治学院へ送られたのであつた。

尚この明治学院へ入るといふに就いては、今、三菱の重役をして居られる江口定條先生に、もと私が就いて語学を学んだといふ縁故から、尚一層英語を研究するには、何処の学校がよからうかと聞いたところが明治学院がよからうといふことで、それからあの学校へ入ることに定（き）めたのであつた。

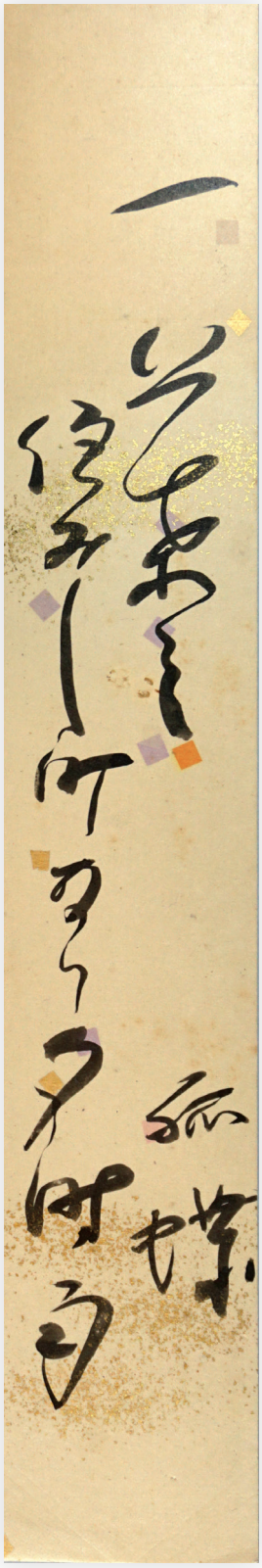
学校へ入つて一二年ばかりの間は、学校のことなんぞ勉強して、うか〳〵と日を過した。その前から私は学校の図書館に入つて、西洋の詩人の伝記などを読み耽るやうな青年になつた。そして政治家にならうといふやうな考へは、もう其時分は捨てゝ了つて、快活な遊戯なども抛ち、面白い友達なども余り交際はなくなつて、一時は非常に憂鬱な、考へ深いやうな風になつた。そして今まで自分が思考して居たことは皮相に過ぎなかつたと思つて、文学とか、宗教とかいふ方に心を潜めるやうになつて了つた。

私共の学校には、外国の宣教師が大勢居たので、自然と宗教の話を聴くやうな機会が多かつた。その為に私なども、耶蘇教の世界観、宇宙観などに大分苦しめられた。それから、厳粛な清教徒的（ピューリタン）の宗教思想と、奔放不羈な芸術思想とが、幼稚な頭の中に闘つて居た時代もあつた。あの時分は、よく寄宿舎の窓のところへ行つてその時分青年の間に愛読されたシエクスピアや、ギヨテや、バイロンなぞを読んだり論じたりした。その当時の有様は今もよく眼に映つて居る。

それから学校の講堂では、いろんな文学、宗教、又は哲学に関する講演があつて、大西祝氏の『悲哀の快感』徳富蘇峰氏の『インスピレエシヨン』などいふ説が、その講堂で発表された。斯ういふ諸先輩の新しい意見を聴いたり、新説に接しようとしたりしてチヤペルの窓に日が赤く映る頃、開会を知らせる鐘が鳴ると、友達などゝ一緒に寄宿舎から出かけて行つた。

島崎藤村全集　第十四集『新片町より』（新潮社、一九四九年）所収

馬場　孤蝶（一八六九－一九四〇）



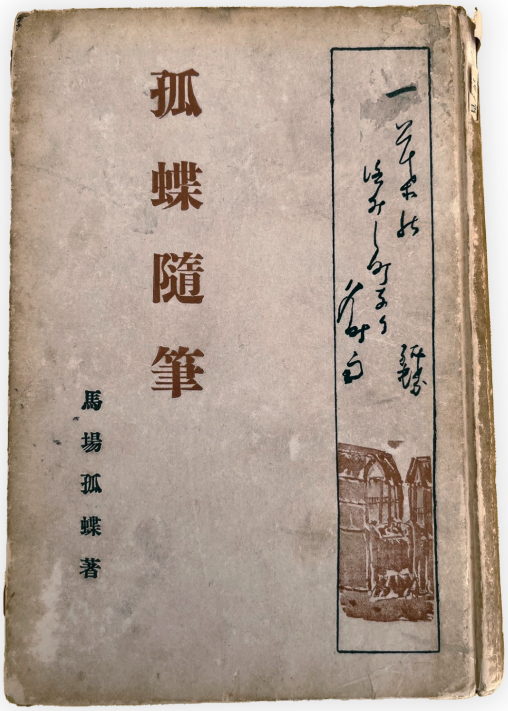
一葉の住みし町なり夕時雨　孤蝶

短冊〔年未詳〕

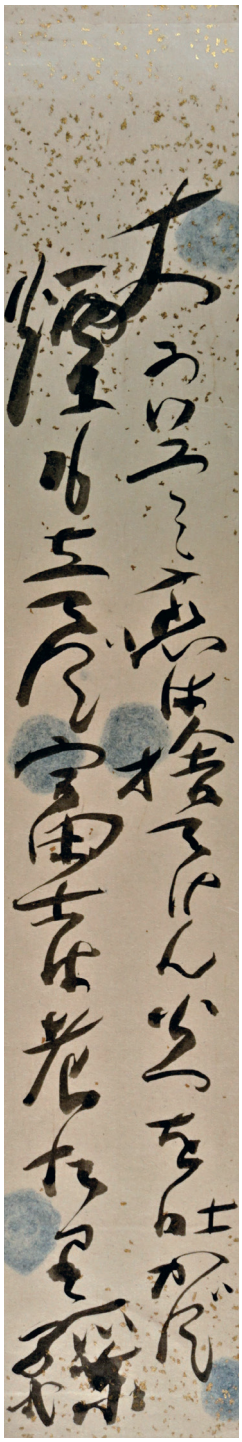
現在の高知県に生まれる。本名は勝弥。一八九一（明治二十四）年普通学部卒。英文学者、翻訳家、随筆家。

この「一葉の」の句は、親交のあった樋口一葉（一八七二－一八九六）が暮らし、一葉の短編小説『たけくらべ』の舞台ともなった龍泉寺町（現在の台東区竜泉）の横町の景色を思い出して詠んだもの（『博浪沙』第五巻第八号、馬場孤蝶追悼号、一九四〇年七月、三十一頁）。

孤蝶はこの句を好んでよく書いており、自らの著書の扉に染筆することもあったという（斎藤昌三著『書斎随歩　少雨叟第六随筆集』書物展望社、一九四四年、二七七頁）。また『孤蝶随筆』（新作社、一九二四年）の表紙にも用いられた。

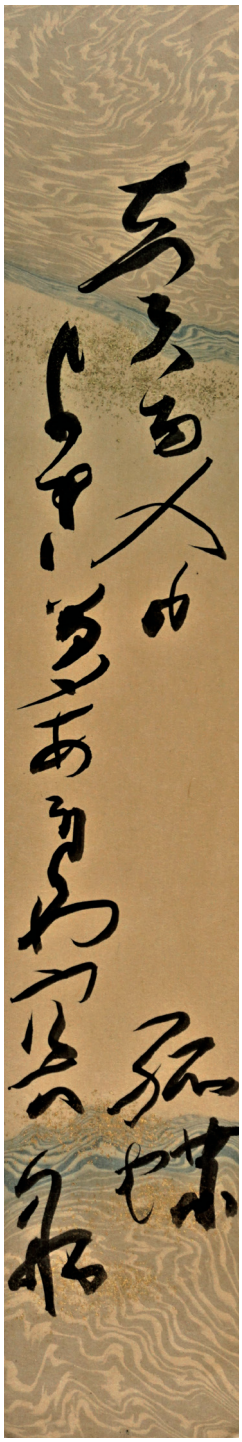


【参考】『孤蝶随筆』（新作社、1924年）表紙



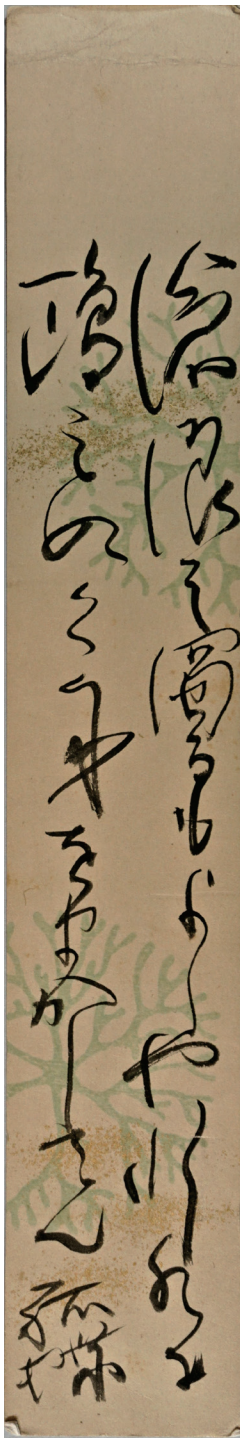
大空の恋は捨てけん火を吐かず煙も立てず富士は老たり　孤蝶

短冊〔年未詳〕



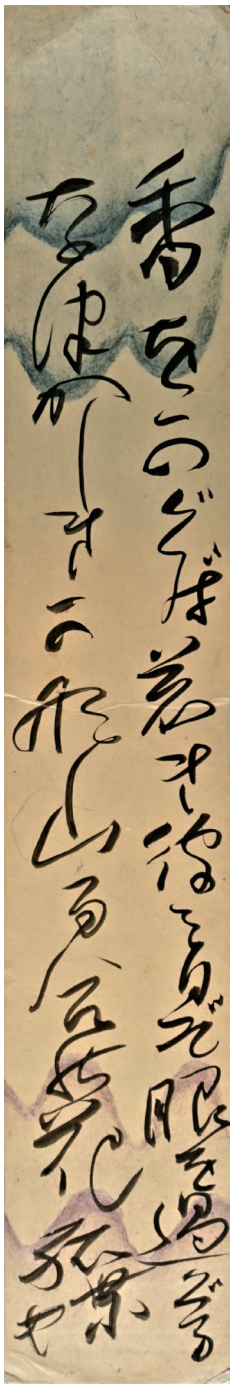
売る人もよき夢あれや宝船　孤蝶

短冊〔年未詳〕



滄浪の濁るもよしや行水に鴎の如く身をまかしてん　孤蝶

短冊〔年未詳〕



香をかげば若き彼の日ぞ眼を過ぐるなつかしきかな山百合の花　孤蝶

短冊〔年未詳〕

馬場孤蝶の明治学院時代

馬場孤蝶著「明治学院時代の追憶」より

僕が明治学院に入学したのは、明治廿二年の一月であつた。初めて、教場へ出た時には、親類から貰つた着古しのモオニング・コオトを着て居た。戸川君（戸川明三・秋骨）は、是をフロツク・コオトだと覚えて居るといふのだが、それは、フロツクでは無くて、モオニングだつた事は確かである。

島崎君（島崎春樹・藤村）の全盛時代は過ぎて居て、比佐道太郎―号を後凋といつた男（芳川顕正氏が逓信大臣をして居た時の秘書官であつて、三十五年の初夏に郷里磐城の小名浜で病死した人）の全盛時代であつた。二年級の第二学期の初めであつたのである。その時分には島崎君はそろ〳〵踏晦を初め出した頃なので、一二度気の利いた金釦の制服姿を見掛けたのみであつた。が、君の盛名は尚ほ儕輩の間に隆々たるものであつた。例の回覧雑誌なども、二三種あつたやうであつたが、その当時のには、島崎君の文章は見え無かつた。〔中略〕

第二学期から、島崎君の出席はだん〳〵稀になつて、第三学期は全く見え無かつた。九月、即ち第三年級の初めになつて、島崎君は帰つて来た。聞けば、高等学校の入学試験に失敗したといふ上に、脚気の上りであるといふので、杖を突いて、教場へ出て来て、甚どく意気銷沈の有様で、初めての日などは机へ突つ伏して、暫時、顔をあげ無かつた。服装は、衣は肝に至るといふ程では無いが、質素な和服であつた。

なか〳〵皮肉な人で、ポンチを書いて他人を冷やかしたり、妙な所へ、言葉を挟んだりして、澄まして、冷笑して居ることなどがあるので、僕はよく『君は陰険な男だ』と云つて、島崎君を怒らして、寄宿舎の一室で組打をしたことなどがある。そのうちに、島崎君はだん〳〵学課の方などは構は無くなつて、外国教師の教場で、自分が答をする番になつても、唯だ、点頭をしたのみで、平気で居るので、教師の方でも、為方が無いから、君を抜かして、他のものにやらすといふやうになつて来た。ランヂスといふ教師は『島崎といふ男は、非常に能きる男だが、非常な惰け者だ』と云つて居たさうであるが、実際、島崎君は、学課は構は無かつたが、読書は十分やつて居たやうであつた。

何んにしろ、当時の教場に出て居るわれ〳〵の態度といふものが、のん気なもので、下読でも十分にしてあれば、何時、当つても、平気であるといふので、比佐などは、隅の方へ引込んで、教師の講義中、小声で『朝顔』の宿屋のさわりをやつて居ると、島崎君は、ポンチで、我々の演説振などを冷かして、次ぎ〳〵に廻はして居るのである。〔中略〕

第三学年の終り頃から、島崎君は、ひどく沈黙家となつて、友人と決して口をきか無くなつて、何時の間にか、寄宿舎を出て何処へか下宿して了つた。忽然として、教場へ出て来て、忽然として、何処へか行つて了ふ。遠方をうつむき勝に歩いて居るのを見て、話でもしやうと思つて近寄つて行くうちに、何時とも無く影は消えて了まつて居る。その時分、博文館の『歌学全書』を買つて呉れと頼まれて居たので、毎月、一冊づゝ出る度毎に、島崎君に渡すのであつたが、その渡し方が極めて面白い。島崎君は、授業と授業との間は、席へ荷物を置たまゝで、何処へか行つて居るので、手渡しのし様が無いので、その席の机のうへゝ買つて来た本を置て置くと、やがて、授業の鐘が鳴つて、帰つて来た島崎君は、書を取りあげて、妙に真面目な顔で、僕の方を振り向いて、目礼をするのであつた。が、卒業間際になつてからは、忽然主義を大分緩められたので、何故、左様まで踏晦したのかと聞いたら、『人に逢ふと、宜い加減な事を云つていかぬ。宜い加減な事を云ふので、人に才子だ才子だ云はれる。此れが残念だから口をきかぬやうにするには、人に逢はぬやうにするに限ると思つて、隠れて居た』という説明であつた。島崎君は、勇猛な自家矯正家である。思切つた断行家である。

戸川君とは、何うして近しくなつたか覚えて居無い。君は、落着た真面目な莞爾やかな人で、大抵な場合は黙つて居たが、実際はなか〳〵の理屈屋さんで、イ

ザとなると、簡潔な言葉で肯綮に中る意見を出すので、級中でも重ぜられて居た。

戸川君の談話には、明治学院の図書館が利益を与へたとあるが僕などは一向に恩恵に預ら無かつた。僕はさういふ心得が無かつた故か、何うか、ロクな文学書は無かつたやうな気がする。モオレーのメン・オブ・レタアス（米国版）一揃と、ロルフの沙翁集解が六七冊あつたのばかりしきや記憶せぬ。尤も、僕は、図書館へ入らうにも、学課に追はれて苦しんで居て、そんな隙が無かつたのであるから、僕の記憶は一向アテにはならぬのであるが。〔中略〕

明治学院の教師に、文学好の人があつたといふのでは無いが、読んだ書には、文学書が少く無かつた。ハリスといふ教師の教場では、パラフレエズといふよりも寧ろリイディングといふやうな行り方で、『イノック・アアデン』だの『エンシエント・マリナア』だの、『マアチヤント・オブ・ヴエニス』など読んだ。何にしろ、注釈もロクに無いやうな書で、素読的にやるのであるから、字でも引て置かずは何んの事やらまるで解からずに了まう訳になるので、かういふ時間を無意味に終はらせまいとするには、勢、一応訳解を自分でやつて置か無ければならぬ。で、自然とリイディングで意味なり、全体の調子なりが解かるだけの準備をしたのである。教師は至極ノン気な老人で、所々一寸い〳〵と説明しては、ヅン〳〵進むので、短かい詩などは、直ぐに読み終はつて了まう。われ〳〵にはかういふやり方は外国の書物を全体として読む稽古になるので、大に利益になつたかと思ふ。

訳読では、故石本三十郎先生の担当で、スペンサアの『フイロソフィー・オフ・スタイル』と、ゴオルドスミスの『デザアテッド・ヴイレエヂ』と、スイントン英文学中のグレイの『チャアチャアド』を読み、井深梶之助先生の教場では、同上英文学中のエマソン、カアライルなどを読んだ。そのほかには、ジエボン―ヒル論理学、マコツシの心理学をランヂス氏が受持たれ、ド・ラベレエの理財学をマクネア氏が受持たれ、星学をバラ氏が受持られ、フイジヤアの万国史、グリインの英国史等を故マコオレエ氏が受持たれたのであつたが、これが、皆暗記物で、大抵七八頁位を指定して置いて、次ぎの授業時間に、口答をするのであるから、必らず目を通して置かうとすると、可なり忙がしかつた。僕などは頭が悪るいから宵から深更まで殆ど教科書と首つ引の有様であつて、やう〳〵日本文の小説を読む隙位しきや無かつた。

漢文は、課目に無かつたやうに記憶するが、和文は近藤といふ先生の担当で、『竹取』、『源氏』などの輪講をやつた。『帚木』では、先生が極りを悪るがるのを、比佐だの、僕だのは『先生、何にも可笑しいことでは無し、さう御遠慮なさらずに詳しく講義してください』など、云つて、先生を大に弱らしたこともあつた。国文の課目のあつたお蔭で、僕などは三年級の終りの夏休に『落窪』、『住吉』、其の他の物語や日記類を自分で読んだ。

特筆し度いのは、外国教師諸君のまことに大まかな態度であつたことである。何んな書物を読まうと構はぬは勿論の事、勉強を強いるやうな所は少しも無いし、試験などは、何うでも宜いといふ風であつた。答案などは、何うでも宜いといふ有様であつた。一度信用を得れば、少々間違つた答案を出しても相当な点数は与へて呉れられた。僕などは、星学の答案に、飛んだ間違を書いて、僕の書いた通りで行くと、月が西から出て、東へ落ちることになる訳なのであつたが、点はといふと九十何点か付いて居た。かういうことは、まことに不取締のやうであるが、さればと云つて、われ〳〵は、答案などは何うでも宜い、平常の稽古もなる可く胡麻かして置かうなど、は思は無かつた。出来得る限り下読を精密にして置くやうにしたのである。平常この男はこれだけの男であると信用されて居て、人を欺むくのは、誰しも好ましく無いのであるから、自然と自分の価値を落とすまいとするのは人情である。かういふ人情に訴へる学生の監理方は有意か、無意かは知らず、甚だ心持が好い。僕などは、今でも、さすがは西洋人のやり方だと感服して居る。それで、明治学院の普通学部は四年級で終はつて居るのであつたから、吾々の卒業したのは、二十四年の六月であつた。

『闘牛』（天佑社、一九一九年）所収

賀川　豊彦（一八八八－一九六〇）

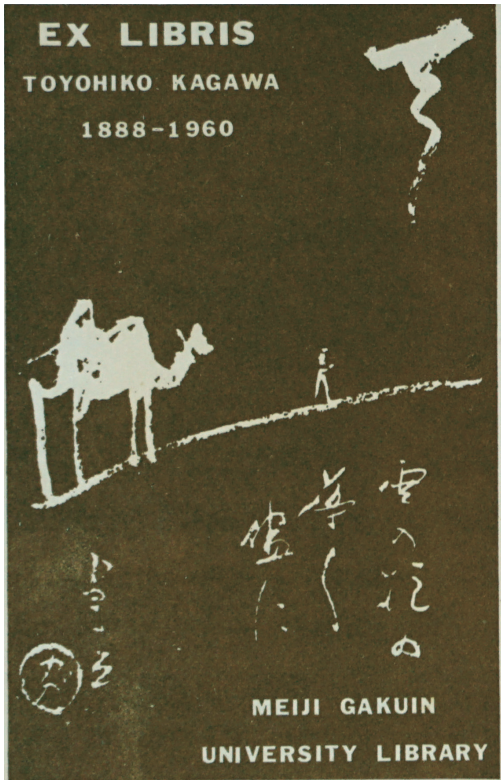
色紙　1951年

砂漠に
途あり
窮迫に
策あり
雲の柱の
導くまゝに
トヨヒコ　カガワ
一九五一・九・三〇

兵庫県に生まれる。社会運動家。日本生活協同組合連合会初代会長。一九〇七（明治四十）年高等学部神学予科修了。

一九〇九（明治四十二）年、社会の底辺で貧困に苦しむ人々を救うために神戸の貧民窟での生活を開始。一方、一九一四（大正三）年から三年間、米国のプリンストン大学および神学校に留学。この留学を機に、貧困層を生み出す社会構造そのものを変える必要性を感じた賀川は、帰国後、労働者とともに労働組合を合法化する運動を展開していく。一九二〇（大正九）年に刊行された小説『死線を越えて』はベストセラーとなった。また日本人初のノーベル文学賞候補、戦後初の日本人ノーベル平和賞候補となる。

当該資料の書画は、『旧約聖書』「出エジプト記」十三章二十一・二十二節に基づいたもの。同様の書画は、賀川が一九二二（大正十一）年に創刊した個人雑誌『雲の柱』の表紙や雲柱社のロゴマークとしても使われている。賀川は人の求めに応じてこの書画をよく描いたようである。当該資料は小川久太郎氏寄贈。



賀川豊彦文庫 EX LIBRIS

書画帖『白金芳墨集　四』所収　1948年

雲の柱の
導く
侭に
一九四八・一・二三
トヨヒコ
カガ

図版右は、前頁の色紙よりも三年ほど前に書かれた同様の書画（当館所蔵『白金芳墨集』所収）、図版左は、これをもとに作成された明治学院大学図書館賀川豊彦文庫のEX LIBRIS（蔵書票）である。

賀川の蔵書がご遺族より明治学院大学図書館に寄贈され、一九六三（昭和三十八）年に整理を終えて『賀川豊彦文庫仮目録』（一九六三年）が作成された。整理に際し、この蔵書票が賀川豊彦文庫八五〇〇冊の各冊ごとに貼付された。

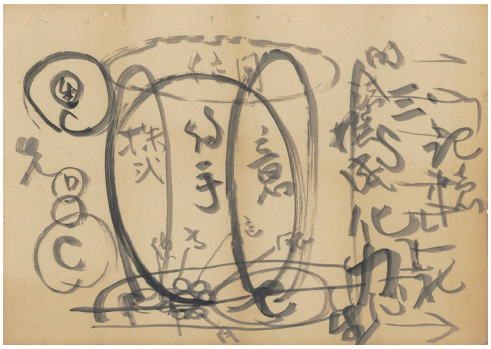
当時、明治学院大学図書館長であった斎藤茂夫は『賀川豊彦文庫仮目録』の序文に、このEX LIBRISについて触れて、「先生が一九四八年一月二十三日、本学で講演せられたとき、わたくしの求めに応じて「雲の柱の導く儘に　トヨヒコ　カガ〇」と、芳墨帖にこころよく筆をはしらせて下さった筆跡を、セピヤ地に白抜きに印刷して、先生を偲ぶよすがとしたものである」と記している。右文中の「芳墨帖」は『白金芳墨集』のこと。

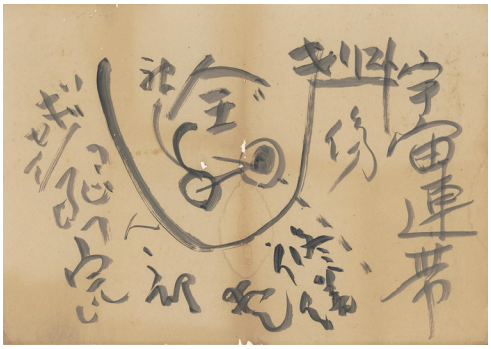
賀川は後年、明治学院の図書館について次のように語っている。「若し明治学院にあの当時あの様な立派な図書館が無かつたならば、私は明治学院を早く棄てゝゐたかも知れない。実に私は一生を支配する程の智的満足を、明治学院の図書室から獲得し得たのであつた」（本書五十頁参照）。

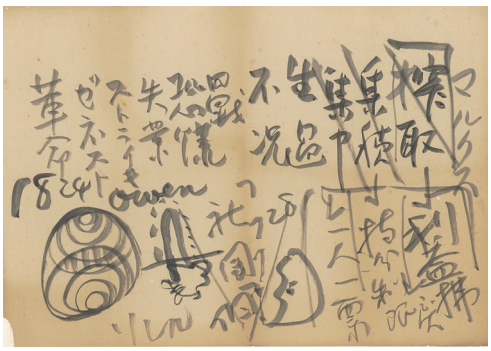
なお、EX LIBRISの貼付された八五〇〇冊は現在、財団法人雲柱社 賀川豊彦記念松沢資料館にすべて寄託されている。

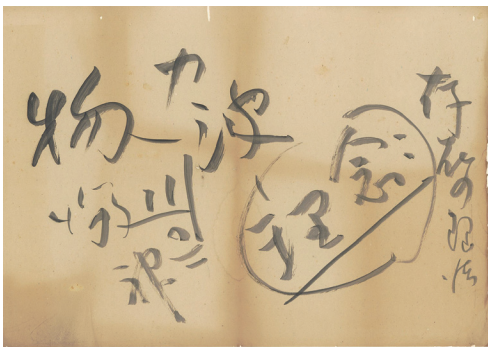
賀川豊彦の講演および講義資料

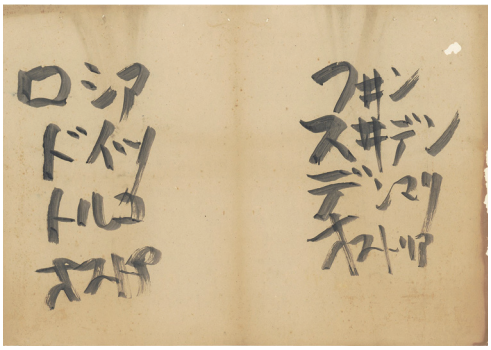
明治学院七十周年記念の講演や学院での講義において、賀川が用いた資料が残されている。講演の時、賀川は大きな模造紙を二、三十枚ほど用意させ、講演をしながら墨汁でそれにたくみに画や文字を書き、内容を説明した。来会者は講演のあと、それを争って持ち帰ったという。

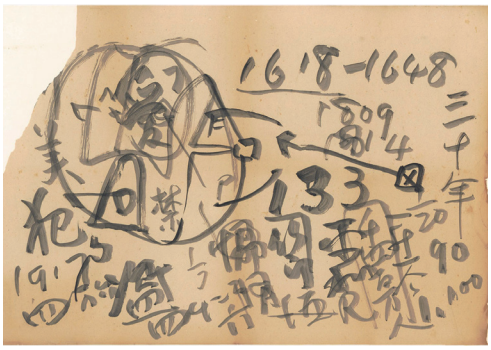


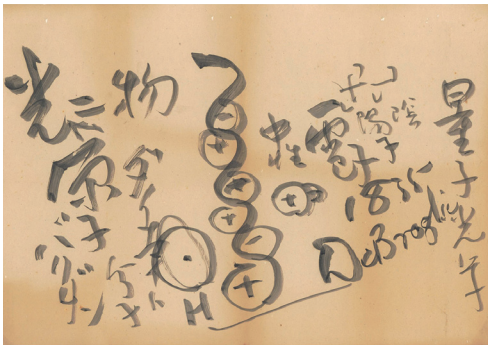


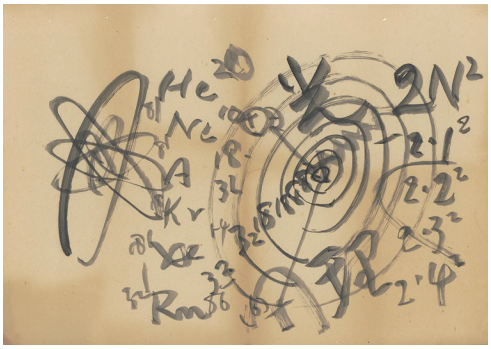


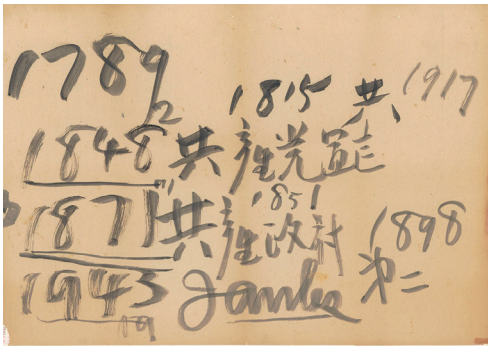


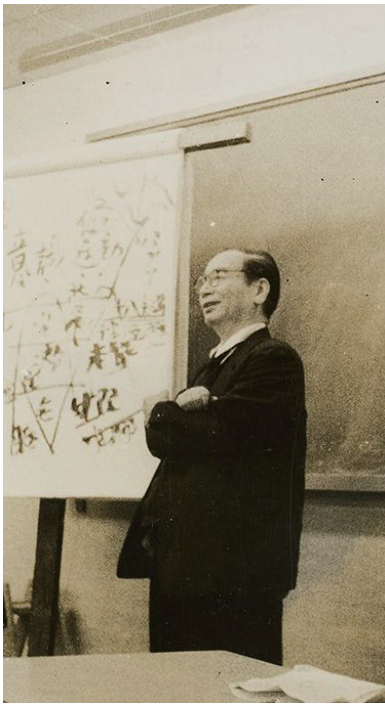




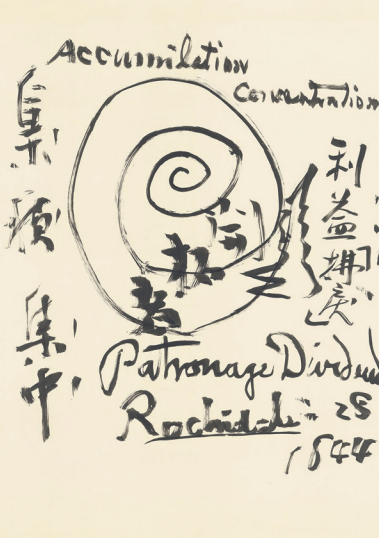


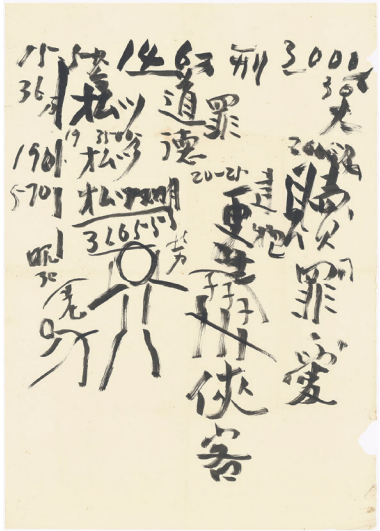


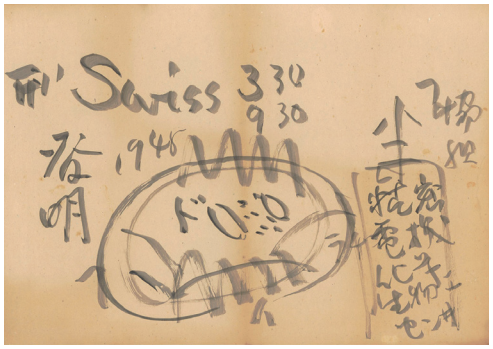


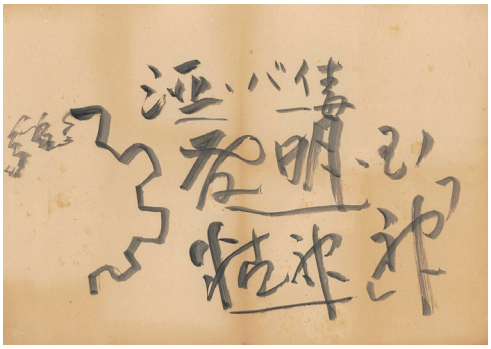


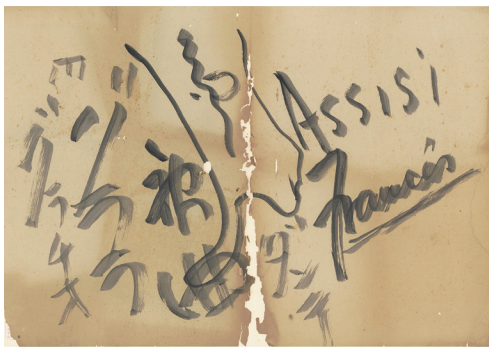
講義中の賀川豊彦

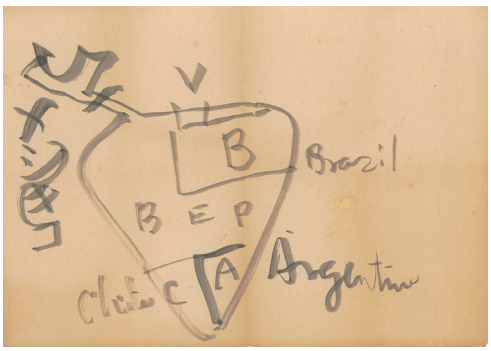

Accumulation
Conservation
Patronage Dividend
Rochdale
1844

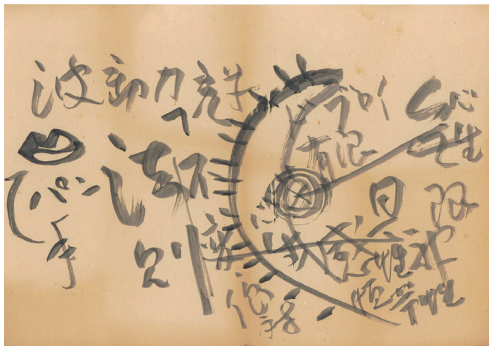


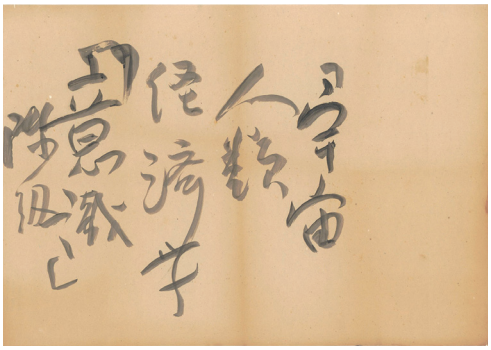

Swiss
1948

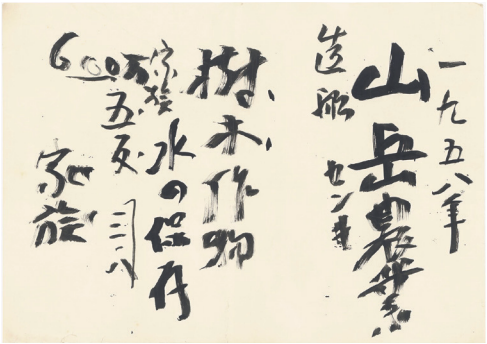


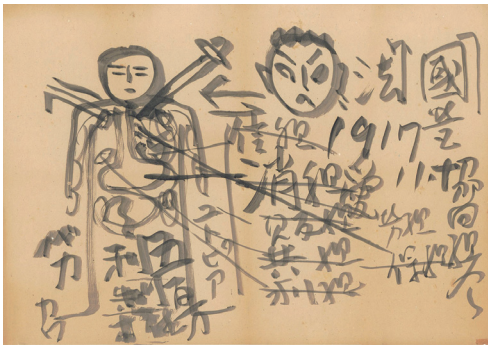

Assisi
Francis

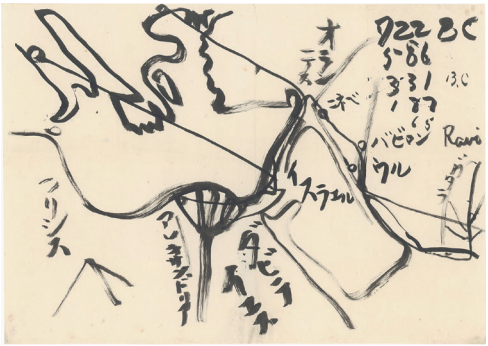

Brazil
Argentina

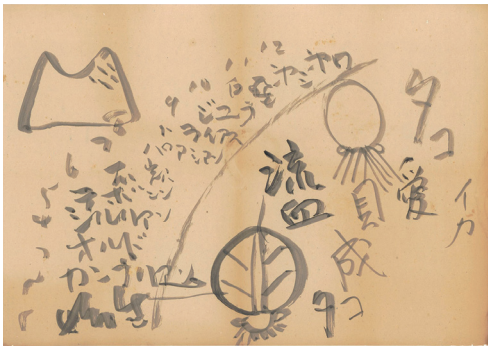





一九五八年
山岳
樹木作物
水の保存


1917


922 BC
586
331
Babylon
Rome


流血

扇面〔年未詳〕

幼児を
我に
来らせよ
天国に
入るもの
かくの
如し　トヨヒコ

しげ子に

「幼児を…」の本文は『新約聖書』「マルコによる福音書」十章十四節に拠る。

本文に「しげ子に」と宛書があることから、この扇面は賀川の次弟賀川喜敬（よしたか）の長女しげのために作成されたものと思われる。しげは、一九二八（昭和三）年に生まれており、当該資料はそれ以降の作品か。

子どもを「神の子」「育まれる存在」と捉えていた賀川は、一九三一（昭和六）年、四十三歳の時、幼児教育事業として松沢幼稚園を開設。子どもと遊ぶことの大切さを説くとともに、自然教案という独自のプログラムを作った。一九九九（平成十一）年、賀川はユニセフの「子どもの最善の利益を守るリーダー」として、世界の五十二人の一人に選ばれている。

【参考】
色紙「幼児の如くならずば天国に入る能はず」（複製）
賀川豊彦記念松沢資料館所蔵
愛知県三河地方の津具村で転地療養したことのある賀川が、1933（昭和8）年頃に同地を訪れた際に描いたもの。本文は『新約聖書』「マタイによる福音書」18章3節に拠る。

賀川豊彦の明治学院時代

賀川豊彦著「腹這ひして見た蜃気楼」より

白金の第一年は、私には寂しい寂しい一年であった。私は人よりも一年早く中学校を卒業して、明治学院に這入つたのは明治三十八年の四月であった。トルストイに感化せられた無抵抗主義の青年は、その頃また異性に対する熱愛を感じ初めてゐた。徳島の宣教師から洗礼を受けて、その宣教師に可愛がられた関係で、英語は少し出来た方であつたのと、大のおませで学校の勉強が詰らなくて仕方が無く、毎日〳〵哲学書を読んでゐた私は、随分生意気だつたものだから、人に殴られたことは屢々であつた。然し私は、明治学院を天国の次に聖い処だと思つてゐたに拘らず、不良少年も居れば、かつぱらひを専門にする者も居る様な始末で、私はヘボン館の同室のUといふ中等科三年の不良少年から、刀でおどされた事は一度や二度ではなかつた。鶏泥棒の上手なHや反基督精神で固つてゐた吉田信乃公（某大官の胤状で、キリスト教の洗礼を受けてから、私と最も親しい友人の一人になつたが不幸にして彼は若くして死んでしまつた。生粋の江戸つ子だつたものだから、みんなが信乃公信乃公と呼び捨てにした）などは、校庭で頗る勢力を持つてゐて、キリスト教の勢力は実に萎微として振はざる状態にあつた。それで私はどん〳〵それ等の人達にぶつゝかつて行つた。私は小さいマルチン、ルーテルを気取つて、あらゆる場所でそれ等の人達を罵つた。そして私は殴られた、そして私は泣いた。

二年目からは非常に愉快であつた。ヘボン館からハリス館に引越した。私は最初、今高松の教会の牧師をしてゐる高田銀造君と一緒の部屋にゐた。私より年も上だし、社界の事をいろ〳〵知つてゐるので、私を弟の様に可愛がつて呉れた。隣の部屋に加藤一夫君が居た。その当時加藤君は筒袖の羽織を着て、中田重治氏の小川町の教会に繁々通ふてゐた。そして手を叩いてリヴイヴル唱歌を一生懸命に歌つて居た。私達は二階に住んでゐたが、階下には今明治学院神学部の教授をしてゐる村田四郎君等が住んでゐた。村田君は大食倶楽部の会長としていつもにこ〳〵してゐた。この中私は亦部屋を変つたが、暫くの間今慶応大学の英文学の教授をしてゐる佐々木邦君の隣に居た。其処では一晩、島崎藤村先生や馬場孤蝶先生が来られて、吾々少数の者と座談会を開いて呉れたこともあつた。その後、今明治学院の文学部の責任者である中山昌樹兄が佐々木邦君の居た部屋に這入つて来た。中山と私はハリス館の二階から一緒に落ちたりなどして命拾ひしたことなどもあつた。若しもハリス館の傍に背の低い杉の木が無かつたならば、私か中山かのどちらかは、今頃地上には居なかつたであらう。

私は余り学校の授業にも出ないで、ライブラリーから哲学の書物を借りて来て一生懸命に読み続けた。その当時、今神戸大丸の支店長をして居られる富尾氏がライブラリアンであつたものだから自由に書棚の間に入れて貰つて、カントやヘーゲルの英訳を一生懸命に読んだ。その中でも今猶忘れられないのは、十八の春読んだバウンの「メタフイヂツクス」であつた。私はあの書物程私に感化を与へて呉れた物を知らない。

その後、米国カリフオルニヤのロスアンゼルスへ行つた時に、南加州大学の塔にウエスレーと並べて、このバウン教授の塑像が立つてゐたのを見て、明治学院の昔を想ひ出して帽子を取つてお辞儀をしたことであつた。バウンの有神論、人格主義などはメタフイヂツクスに比べて遙かに書き振りが徹底してゐない様に思ふた「人格主義」は「人格的宇宙観として」の日本訳がある。バウンの影響で私はロツチエを一生懸命に読んだ。ロツチエの物で私は読み通してゐないものは、ミクロコスモスだけであらうと思ふ。私は明治学院の後の一年程よく勉強したのは、プリンストンの二年間に持つた外、私の半生の中に他に持たなかつた。然し若かつただけに、プリンストンで読んだよりか頭の中によく入つてゐる。ラツドの宗教哲学を読み通したのも十八の時であつた。ヘフデイングの宗教哲学、ケヤードの宗教哲学、フリントの歴史哲学、ヘーゲルの歴史哲学等を読んだのはこ

の年であつた。私は毎朝四時から起きて、朝飯を食はないで午前十一時迄読み通すことが常であつた。

漢文の武市先生は実に良い人であつた。孟子を教へてくれた。然し書物で発表して居られる孟子言行録は実に立派なものであると思つたが、講義は出ても詰らなかつたので余り出なかつた。そして宗教哲学と歴史哲学に力を注いだ。それと云ふのも十一歳の時に禅寺に行つて孟子の素読を了つてゐたから、もう一度孟子を読まされるのは随分苦しかつたからであつた。漢文の先生は教室に出なければ一時間に対して三点づゝマイナスにすると云はれた。学年末には私の漢文の点数はマイナス九点であつた。で私は漢文で落第したが、平均点数がよかつたので、お情で一等尻から及第さして貰つた。スイントンの英文学史をやらされた時も私はM教授から教室退去命令を喰つた。その日私は朝飯を食はずに午前四時頃から、ラッドの宗教哲学を読み耽つてゐたが、余り教室に出ないと先生に済まないと思つて、顔を見せる為めに教室へ出た。そしてスキントンの英文学史を持たないでラッドの宗教哲学を読み続けた。『賀川さん何を読んでゐますか』とM教授が訊かれた。それで私は書物を見せた。すると皆川教授は『英文学史を読まないのなら出ていらつしやい』と教室の扉を開かれた。それで私は静かに校庭に出て、ラッドの宗教哲学を読み続けた。

私はいつでも自分の経験から思ふことであるが、私の様な変態な者には今日の様な機械的な教授法は全く精精虐殺法であると思ふ。その前方に私はテイヌの英文学史やシユレーゲルの歴史哲学を読んでゐたから、文学史が何を意味してゐるかをよく知つてゐた。

それでも先生が本気になつて英文学の本質を教へて呉れるなら、私も少し本気になつたであらうが、毎日々々リーディングと訳読の為に出席するのであれば私は実に詰らないと思つた。その意味から考へて私は小原國芳などがやつて居られる成城学園のメソード等は、私はいつも賛成したい教育法である。若し明治学院にあの当時あの様な立派な図書館が無かつたならば、私は明治学院を早く棄てゝゐたかも知れない。実に私は一生を支配する程の智的満足を、明治学院の図書室から獲得し得たのであつた。

あの当時私の組は六七人の極小さい組であつたが、私は実に贅沢な善い学校だと思つた。その日明（ママ）治学院の高等学部も人数を増して今日では昔の様な自由はない様だが、せめて教育法なりとも昔の自由を残して貰ひたいものだと思ふ。私は明治学院を去つて後、神戸神学校に行つたのであつたが、明治学院で一緒に居た友人は一生を貫いて私の最も親しい友人になつた。

其頃の白金は今よりもう少し美しかつた。春には桜が校門の傍に咲き乱れ、ハリス館の二階からはお隣の大きな広い庭が、自分の庭の様に見えた。校庭から石器時代の土器が出るので、雨降りの揚句はよくその土器を採し廻つた。ヘボン館の第五階はいつも我々の祈祷会の催される所であつた。其処から品川湾は一眸の下に収められた。何とも云へない眺めを恣にすることが出来た。時々校庭に蜃気楼が立つので腹這ひしてよく逆倒に映る美しいミレーヂを眺めた。徳富蘆花の「自然と人生」の中に書いてある雑木林の美しさに誘惑せられて、目黒の方面に毎日必ず散歩に出掛けた。

その頃の目黒はまだ野趣に溢れて居て何とも云へない程の美しさが残つてゐた。よく中山と二人で池上の本門寺辺り迄歩いたことがあつた。その当時神学予科でキリスト伝を教授せられた松永文雄先生が目黒に住んで居られたから、私はよく其処へ通ふて行つた。そしていつも先生の住んで居られた藁小屋が美しいと思つて帰つて来た。然しもう今日ではあの辺りは全く大きな町になつて仕舞つて、見る影もない有様になつた。そして明治学院も昔の様な詩的な処が無くなつた。昔の建築は随分堂々たるものであつたが、今はヘボン館の火事やサンダムホールの火事や、校門の傍にあつたチヤペルの無くなつた為に、私が居つた頃の建物は今総理の居られる図書館のあるホールだけになつて仕舞つた。

然し建築物等は考へように依つてどうでもよいものである。どうぞ希くば白金に神につける自由と敬虔が永遠に続く様に祈りたいものである。（一九二七、七、二一）

鷲山弟三郎著『明治学院五十年史』（明治学院、一九二七年）所収

佐々木 邦（一八八三―一九六四）

這蛙
縁談隣村にあり　邦
〔印〕邦

色紙〔年未詳〕

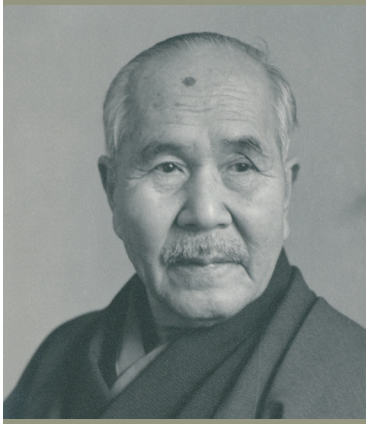
独り
興ず
蛙鳴く夜や
月に暈　邦
〔印〕邦

色紙〔年未詳〕

静岡県に生まれる。ユーモア作家。翻訳家。一九〇五（明治三十八）年高等学部卒。のちに明治学院高等学部で英語講師を、また、明治学院大学では英文学の教授を務めた。学生時代から米国のユーモア作家マーク・トウェインを愛読、『トム・ソーヤーの冒険』などの翻訳にも携わった。佐々木の著書に、明治学院を「明治学園」として語る『凡人伝』（講談社、一九四六年）や「白金学院」として語る『心の歴史』（講談社、一九四九年）など自伝的小説がある。

『明治学院大学新聞』（一七九号、一九六四年十月十五日発行）に佐々木の死去が報じられた際、当時学院の教授であった平林武雄は「ああいう方を、本当の勉強家というのだろう。偉い人だったと思う」との言葉を寄せた。

「独り興ず」の色紙は佐々木の令弟佐々木順三氏より一九七四（昭和四十九）年寄贈。



蚊のミイラ冬の頁に見つけたり　邦

短冊〔年未詳〕

色紙〔年未詳〕

花吹雪
池半面を
埋めけり
邦
〔印〕邦

明治学院高等学部の卒業生集合写真　1905年
佐々木邦の同級生には、後に明治学院第6代学院長となる都留仙次もいた。前列左から、都留仙次、佐々木邦、浅野一郎、古川笈夫、後列左から、熊野雄七、ボーン、オルトマンス、ワイコフ。

佐々木邦の明治学院時代

佐々木邦著「昔のミッション・スクール」より

偶然の威力に胸打たる

私はよく〳〵ミッション・スクールに縁があった。卒業後も一学期間高等学部（青山学院）に残って、翌年慶応の大学予科に入学したが、一年と一学期で在学困難になった。日露戦争が始まって学資が続きさうもなかった。慶応を卒業するためには予科二年の残りと本科を満三年やらなければならない。若し青山学院へ戻って高等学部の二年級へ入れて貰へれば、一年と二学期で卒業出来る。さうする外に仕方あるまいと考へた。

私は重大問題に限って決断と実行が速い。青山学院へ相談に行く積りで三田の下宿を出たら、雨がポツ〳〵降って来た。雨の中を青山までは大変だから、近くの明治学院へ行って訊いて見ようと思ひついた。何方にでも入れて貰へさへすればいゝ。早く卒業することが急務だった。青山学院と明治学院とは兄弟学校で、連合英語大会をやることもあった。三田から白金は目と鼻の間だ。こゝで私は偶然の威力といふものを深く感じる。

雨は大したこともなかった。明治学院に辿り着いたら、門のところで総理の井深梶之助先生に行き会った。基督教界の名士として夙に見知ってゐる。私は先生を呼び止めて、かういふ事情のものですが高等学部の二年級へ編入して貰へませんかとお願ひした。先生はコウモリ傘を手に持って何処かへ出掛けるところだったが、私を伴って引き返した。門から校舎まで可なりある。事務長に私を紹介したばかりではない。言葉添へまでして、急いで出て行かれた。

これで私は母校青山学院へ戻るところを、俄雨のために明治学院へ転学してしまったのである。折から二学期が始まったところだった。入った二年級は私を加へて六名、ミッション・スクールは何処も生徒が少い。それから十数年後、私は慶応の教師にも明治学院の教師にもなって、両方に勤めたのだから、この辺の思ひ出は感慨が深い。

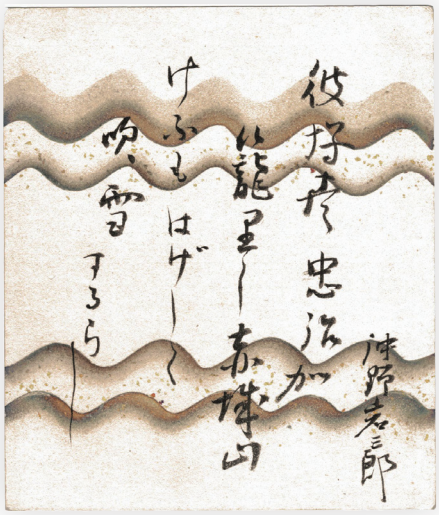
忘られぬ井深先生

私は初対面の貧書生を校門から校舎まで案内してくれた井深先生の親切を度々思ひ出す。先生の表情には少しも迷惑の色がなかった。友達にでも会ったやうに私を伴って引き返したのである。私はあれだけのことが出来るだらうかと考へて見る。外出の折から門のところで、見知らぬ学生に入学の件で話し込まれた場合、それではと言って、伴って引き返すだらうか？そんなことは事務所に行って訊いて御覧なさいと言って片附けるに相違ない。

もう一方、二年級が五名しかなかったことも考へられる。井深先生は平教員でなくて総理だったから、生徒の少いことを苦にしてゐたにきまってゐる。そこへ滅多にない入学志望者が現れたので御機嫌が好かったのかも知れない。それにしても急いで出掛けるところだった。事務所へ行って相談して御覧なさいで十分事が足りる。私としては先生の親切が何とも嬉しかった。是非ともこの学校へ入りたいといふ心持になった。事務長は徴兵猶予の件でむづかしいことを言ひ出したが、百方お願ひして首を縦に振って貰った。或は事務長がやかまし屋だからと思って、先生が言葉添へに態々引き返してくれたのかも知れない。兎に角唯ならぬ親切だから私は感銘深い。

『ニューエイジ』（第二巻第三号、一九五〇年二月）所収

沖野　岩三郎（一八七六―一九五六）



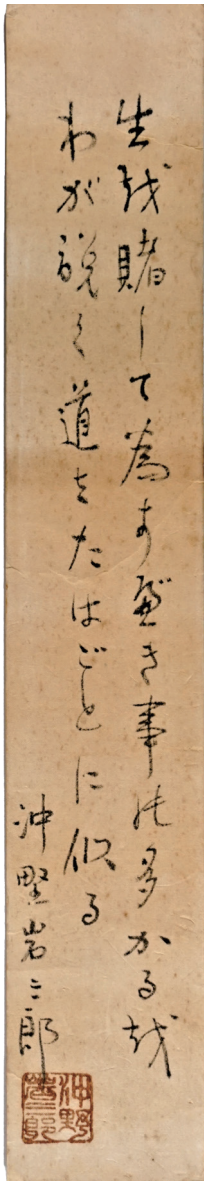
彼博徒忠治が
籠りし赤城山
けふもはげしく
吹雪するらし

沖野岩三郎

色紙〔年未詳〕

和歌山県に生まれる。作家、牧師。一八九七（明治三十）年、小学校教員となり、一九〇四（明治三十七）年まで勤務。同年明治学院神学部別科に入学、一九〇七（明治四十）年卒業。和歌山県の新宮教会に牧師として赴任。一九一〇（明治四十三）年、幸徳秋水らの大逆事件に巻き込まれるが逮捕は免れた。この時の体験に基づいて書いた小説『宿命』が、一九一七（大正六）年、大阪朝日新聞懸賞小説に二等当選。翌年『大阪朝日新聞』に掲載され、一九一九（大正八）年に出版された。小説・童話・紀行など多くの著作を残した。

「生を賭して」の一首は、大逆事件で処刑された亡き盟友・大石誠之助らに送ったものという（関根進著『大逆事件異聞　大正霊戦記―沖野岩三郎伝』二〇〇八年、二四二頁）。また「青々と」の一首は、沖野が朝鮮・満州に旅行した際の紀行文で、音無という人物（沖野自身がモデル）を主人公にして書いた『薄氷を踏みて』（一九二三年）に所収。音無が列車の窓から際限のない青海原のような高粱（こうりゃん）の畑を見て手帖に書き付けた短歌の中に見える。

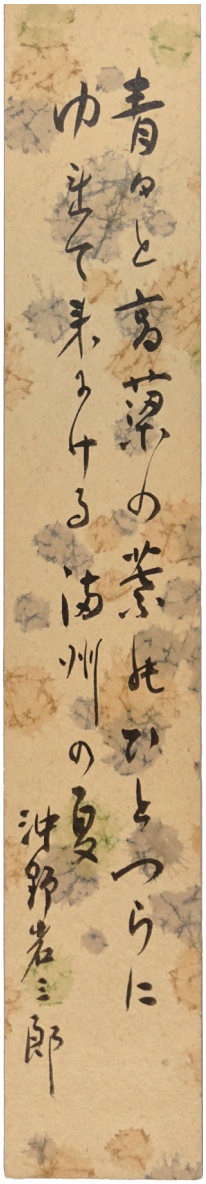


生を賭して為すべき事の多かるをわが説く道はたはごとに似る

沖野岩三郎

〔印〕沖野岩三郎

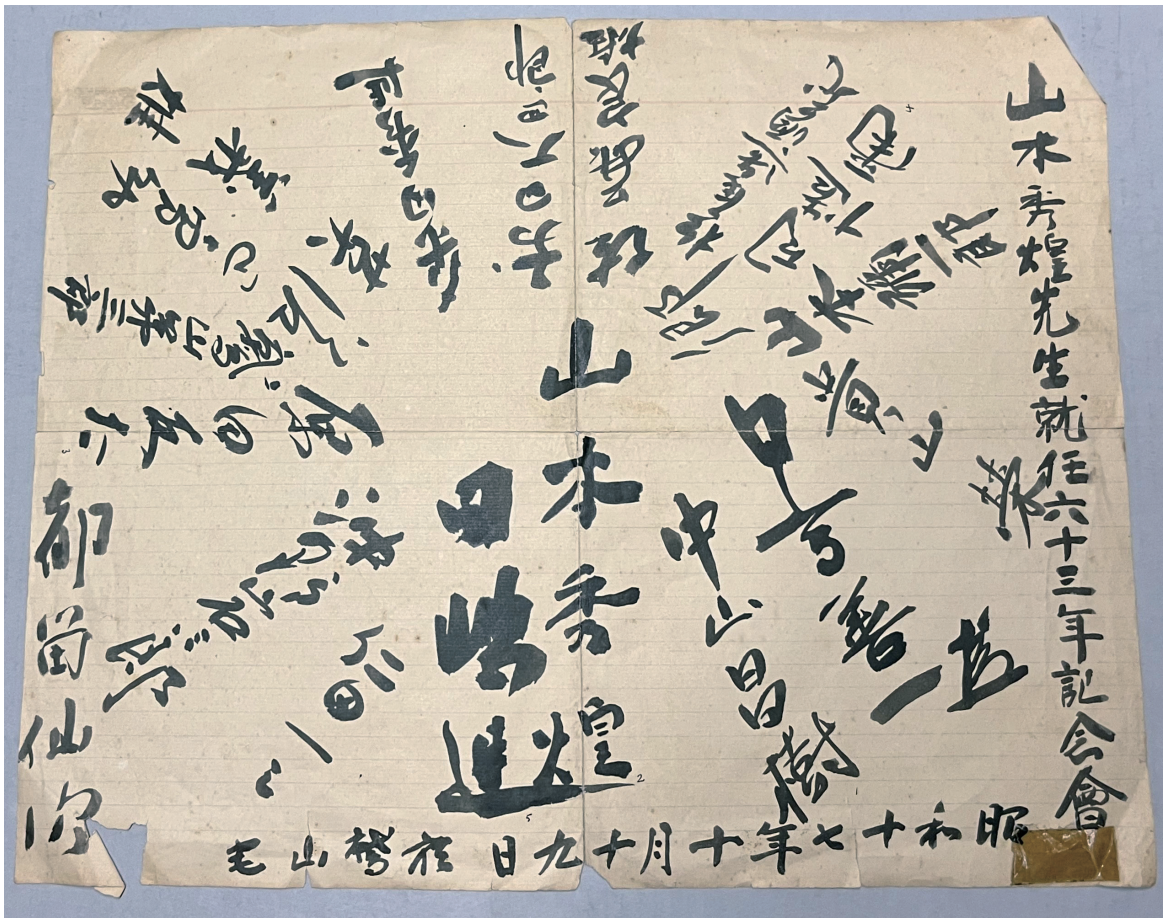
短冊〔年未詳〕



青々と高粱（粱）の葉のひとつらにゆれて来にける満州の夏

沖野岩三郎

短冊〔年未詳〕



山本秀煌先生就任六十三年記念会寄書　1942年

一九四二（昭和十七）年十月十九日、鷲山第三郎宅で明治学院時代の恩師山本秀煌の就任六十三年記念会が行われ、沖野も参加した。その時の寄書には十七名の卒業生が名を連ねている。

寄書の筆者は山本秀煌から右回りで、田島進（明治三十二年神学部卒）、仁田一三（明治四十三年神学部卒）、沖野岩三郎、都留仙次（明治四十年神学部卒）、原田友太（明治四十三年神学部卒）、鷲山第三郎（大正八年神学部卒）、渡辺勇助（大正二年神学部卒）、英義雄（大正三年神学部卒）、桑田秀延（大正七年神学部卒）、前田大四郎（大正十四年神学部卒）、佐藤良雄（大正十二年神学部卒）、松尾造酒蔵（大正三年神学部卒）、郷司慥爾（明治四十五年神学部卒）、山本彌一郎（大正五年神学部卒）、貴山榮（明治四十五年普通学部卒）、日高善一（明治四十年神学部卒）、中山昌樹（明治四十三年神学部卒）。

記念会当日の写真　1942年
裏面にペンで「一九四二年十月、鷲山君宅、山本秀煌先生慰安会」とある。
最後列左から1人目が沖野。

沖野岩三郎の明治学院時代

沖野岩三郎著『非戦論の青年たち』より

日露戦争がはじまった時私は和歌山市にいて宣教師エレフォード氏を助けて和歌山教会の伝導[ママ]をしていた。その時教会の青年部に熱心な非戦論者の青年達がいた。それは杉山元次郎[ママ]、加藤一夫、山野虎一[ママ]、児玉充次郎の諸君であった。その中で児玉、山野の二君は内村氏の聖書の研究誌に依る非戦論者であり、その他はトルストイ案の非戦論者であった。

戦争は連日勝利を伝え市内には日の丸の旗行列が行われ、万歳々々の声が渦まいている時、我々青年会員は猛烈な非戦演説をして教会の長老達を困らせたものであった。けれども私が教会の事にあまりに熱心なのでエレフォード氏は私に明治学院の神学部に入学して牧師になれとすすめてくれた。私は将来新聞記者として身をたてようと思っていたので、これをことわったがあまり熱心に説きつけられ妻と二人で上京した。そして妻は二本榎にあった聖書学院に入学して、オルガンをドレミファから習うことになったが、私の明治学院入りはまだ決心がつかなかった。けれども思い切って入学を申し込むと試験をするから受験に来いという通知が来たので、はじめて明治学院の校内に、入って見ると、周囲にからたちの垣があった。神学校という神の教えをとく学校の周囲にとげのあるからたちの垣をめぐらしていることが私の心を怒らせた。私はその一株を強く蹴っておいて、神学部へ入って行くと、総理井深梶之助先生が居て、私に試験問題をわたしてくれた。それを見ると第一問にクリミヤ戦争の原因と結果を記るせと書いてあった。続く四問題が皆、戦争に関するものばかりであった、これを見た私は非常に憤慨して、予は非戦論者なり、この神学校に入学して神の道を研究せんと願う者にして戦争の事を学ばんとするに非ず。平和なる神の教えを学び得るならば入学するもよしと書いて、井深先生の前にさし置き、さっさとドアを開いて外に出ると、そこに立っていたのは思いがけもなく私の郷里の人で私と共に和歌山師範学校に学んでいた熊代彦太郎君と竜田山三郎君の二人であった。驚いて様子を聞いて見ると二人とも明治学院で国語を教えているとの事であった。そこで私は今日の試験問題について自分の意見をのべ、入学を思い止って時々手紙をもらった事のある竹越与三郎氏に頼んで、どこかの新聞記者にしてもらおうかと考えていることを話したら、二人は折角来たのだから是非明治学院へ入学しろと進めてくれた。けれども自分は試験をうけなかったのであるから入れてくれる筈はないといったら、熊代、竜田の二人が学校側へ話をつけてくれ二人のすいせんで私は仮入学を許された。それで通学するようになったが遂に本入学の許可もなく、そのまま神学部を出て卒業免状をもらったのであった。私が明治学院へは[ママ]入ると間もなく児玉充次郎、山野虎一[ママ]の二君も明治学院に入って来た。学院には吉岡徹、関口幸四郎という猛烈な非戦論者がいて学内で自由に活動したので平和論者の賀川豊彦君と親しくなり、研究会などでずいぶん過激な事をいったが、オルトマンス博士が常に我々の議論を弁護してくれたのでばっせられることもなかった。東郷大将が品川駅を通過するので、学院生徒の全部が歓迎に出ることになったから、神学部も一緒に出よという命令があった。けれども、我々非戦論者の連中は教室にとじこもって出て行かなかった。学校でも何とかして全部歓迎に出そうとして三回も呼び出しに来た、すると山野君は東郷大将と明治学院とにどんな関係があるのかと質問したり、体操教師になって来るのかと関口君が真顔になって問いつめたりした。そこで最後に来たオルトマンス博士はおだやかに我々を[ママ]他の生徒と行動をともにするようにといた[ママ]が我々が承知しないのではこの問題は諸君の愛国心に一任しますといって少しも顔色をかえず外へ出て行った。その時の態度が非常によかったので我々はその後オルトマンス博士を非常に尊敬したのであった。もしも井深先生の寛容とオルトマンス博士の度量とがなかったならば我々は早くに明治学院を去っていたであろう。その頃佐々木邦君は明治学院高等部を卒業して原稿生活に入っていた。賀川豊彦君は神戸神学校に転校してそこを卒業し

て、貧民伝導[ママ]に従事したが当時の牧師達は、ほとんど賀川君の事業をかえりみなかった。けれども実に根気強くその事業をやりとげた。賀川君は神戸神学校卒業ではあるが、そのスピリットは明治学院に残しておいてあった。その後私は島崎藤村、馬場孤蝶、戸川秋骨氏等と相知って明治学院初期のことがくわしくわかり、始めて明治学院のよいところがすっかりのみ込めた。考えてみると私は実によい学校へは[ママ]入ったものであると今更その幸福を感謝せずには居られない。どうぞ明治学院本来の寛容な精神が長く保存される様、切に祈ってやまない。

佐々木邦編『明治学院生活』（現代思潮社、一九五三年）所収

主要参考文献

中野雅宗編著『日本書画鑑定大事典』国書刊行会、二〇〇六－二〇一三年
日本書画落款大事典刊行会編『日本書画落款大事典』上巻・下巻、遊子館、二〇〇七年
日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史人名事典』教文館、二〇二〇年
鷲山第三郎著『明治学院五十年史』明治学院、一九二七年
明治学院人物列伝研究会編『明治学院人物列伝 近代日本のもうひとつの道』新教出版社、一九九八年
明治学院同窓会百年史編纂委員会編『明治学院同窓会百年史』明治学院同窓会、二〇〇八年
明治学院百五十年史編集委員会編『明治学院百五十年史』明治学院、二〇一三－二〇一四年
岡部一興著『ヘボン伝　和英辞典・聖書翻訳・西洋医学の父』有隣堂、二〇二三年
中島耕二著「クララ・リート・ヘボンと「ヘボン塾」」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第四十九号、二〇一七年
松井浩章著『「凡人崇拝」の非凡人　評伝戸川秋骨物語』熊日出版、二〇二一年
平林武雄著「藤村の学友と文学会」『解釈　国語・国文』第二十巻七月号、一九七四年七月
村上文昭著・明治学院大学キリスト教研究所編『藤村から始まる白金文学誌』明治学院大学キリスト教研究所、二〇一一年
武藤富男編『百三人の賀川伝』キリスト新聞社、一九六〇年
鳥飼慶陽著『賀川豊彦と明治学院　関西学院　同志社』文芸社、二〇一七年
財団法人雲柱社、社会福祉法人雲柱社、学校法人雲柱社編『雲の柱に導かれて―雲柱社の歩み―雲柱社七〇年史』二〇二一年
浜野重治編『沖野岩三郎自伝―その前半生―』沖野岩三郎先生顕彰事業実行委員会、一九八三年

二〇二四年三月三十一日発行

明治学院歴史資料館資料集【第二十集】

編集代表　戸谷　浩
発行者　鵜殿　博喜
発行所　明治学院歴史資料館
東京都港区白金台一－二－三七
電話（〇三）五四二一－五一七〇
印刷所　株式会社白峰社
東京都豊島区東池袋五－四九－六
電話（〇三）三九八三－二三二一

ISSN 2186-8794